山梨市文化財調査報告書　第10集

SOMA GUCHI KANAZAKURA JINJYA OKU SHACHI

杣口金桜神社奥社地遺跡

—山梨市牧丘町杣口地内の山岳寺社跡 学術調査報告書—

2006年3月

山梨市教育委員会

山梨市文化財調査報告書　第10集

SOMA GUCHI KANAZAKURA JINJYA OKU SHACHI

杣口金桜神社奥社地遺跡

—山梨市牧丘町杣口地内の山岳寺社跡学術調査報告書—

「米」印の叩き目

2006年3月

山梨市教育委員会

序

本書は、山梨市牧丘町柚口に所在する金桜神社奥社地遺跡の学術調査報告書です。

本調査は、旧牧丘町教育委員会が平成15・16年度に行った調査結果を踏まえ、市町村合併後の山梨市教育委員会が継続して実施したもので、平成18年1月から1か月余り、(財)山梨文化財研究所の協力を得て実施されました。

この遺跡は、金峰山信仰の里宮では県内最古といわれる金桜神社(柚口)の奥社地一帯に広がっています。これまでの調査で、15箇所ほどのテラス、礎石、石段などが確認されていましたが、今回の調査で、遺跡西側から3棟の建物跡が検出されました。これらの建物は、仏堂など仏教建築的要素が強いものであったと考えられます。さらに、発見された遺物から、創建が平安時代まで遡る可能性が出てきました。

また、最も注目すべきは、昭和37年に甲州市勝沼町柏尾の柏尾山経塚から出土した経筒(重要文化財)との関係です。経筒銘文には、康和年間に勧進僧寂円が「米沢寺」の千手観音の前で写経した経文を、柏尾山寺(大善寺)まで運んで供養し埋納したと書かれています。

この「米沢寺」は、柚口地内の米沢山雲峰寺に比定されていましたが、今回発見された寺院跡が「米沢寺」に当たる可能性が指摘されています。今後の研究を待たなければなりませんが、山岳信仰の様相を考える上で、大きな可能性を秘めた遺跡であると考えます。

最後になりますが、山中で、しかも厳寒期の調査にも係わらず、発掘調査に従事していただきました皆様、また、準備から発掘、調査報告書の刊行まで、労をいとわずご指導、ご協力をいただきました(財)山梨文化財研究所の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げ、序といたします。

平成18年3月

山梨市教育委員会
教育長 堀内邦満

例　言

1　本書は山梨県山梨市牧丘町柏口地内に所在する柏口金桜神社奥社地遺跡の発掘調査報告書である。遺跡は山梨市指定史跡で、指定名称は「柏口金桜神社奥社地跡」であるが、遺跡名称として「柏口金桜神社奥社地遺跡」を用いた。

2　本調査は山梨市教育委員会指導のもと、(財)山梨文化財研究所が実施した。

3　本書の原稿執筆・編集は(財)山梨文化財研究所　堀原功・が行った。なお『平成15・16年度　山岳信仰学術調査報告Ⅰ』(以下『調査報告Ⅰ』と略)の記載を参考に、2004年度の調査成果もあわせて報告した。

4　発掘調査における基準点設置、グリッド杭打設、ボール写真撮影業務は(株)フジテクノに委託した。

5　本書に関わる出土品、記録類は山梨市教育委員会で保管している。

6　発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご指導、ご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい(順不同、敬称略)。
峡東地域振興局林務環境部、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県考古学協会、後藤建一(湖西市教育委員会)、山本義孝(袋井市教育委員会)、(株)フジテクノ、(株)エンドレス、高野高潔(昭和測量)、荻原昌郎・湯井一郎(旧牧丘町教育委員会)、清宮俊元・末木健・櫛藤拓仁・飯島泉・(故)若月宇一・津野正康・山本正之・高原左門・若月昇・大村和夫・古明地式夫・武井力・岡利彦・新津健(山岳信仰調査会)、時枝務(文化庁)、寺本就一(和歌山県教育委員会)、森原明廣・保坂和博(山梨県教育委員会学術文化財課)、堀内亨・田代孝(山梨県史編纂室)、笹森久(静岡大学)、塩谷風季、草間正彦(帝京大学)、高橋修・井澤英理子・近藤暁子(山梨県立博物館)、畑大介・河西学(山梨文化財研究所)、芝田操、室伏徹、小林孝子、荻原忠、羽中田壮雄、望月秀和

凡　例

1　遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系(原点：北緯36度00分00秒)、東経(138度30分00秒)に基づく座標数値である(世界測地系数値)。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。

2　遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

遺構	全体図	1/1000
	部分図	1/100、1/200、1/300
遺物	土器・陶磁器・鉄器ほか	1/3
	銭貨	1/1

3　本稿では、斜面を切り盛りして構築された平坦面を「テラス」と呼称する。またテラス面の土留めとして法面に積み上げられた石積を「石積」、テラスにするための石段を「石段」、石積で方形に組まれた遺構を「石組」、石段以外の通路状遺構を「通路」とする。遺構番号については、これまでに報告された「金桜神社奥社地の研究」(2005　櫛原・大崎)を踏襲しつつ、一部変更した。遺構の認定については、これまでの認識と異なる部分があるが、今日までの理解として本報告を一応の到達点としておく。今後の調査によって変更点が生じることが十分考えられる点、ご了解いただきたい。

4　土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』(1991年度版)を使用した。

5　遺物図版番号は遺物観察表番号と一致する。

6　本書地図は国土地理院発行の1/200,000地勢図「甲府」、1/25,000地形図「川浦」、1/50,000地形図「御岳昇仙峡」「甲府」を使用した。

7　本文の引用文献については、最終章末の引用参考文献にまとめた。

本文目次

例　言
凡　例
本文目次
挿図目次
写真目次
表目次
写真図版目次
第1章　経　過 …… 1
　第1節　調査の経過 …… 1
　第2節　発掘作業の経過 …… 2
　第3節　整理等作業の経緯 …… 4
第2章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第1節　地理的環境 …… 5
　第2節　歴史的環境 …… 9
　　1　甲斐金峰山信仰の研究史 …… 9
　　2　柏口金桜神社と米沢山雲峯寺 …… 9
　　3　牧丘町内の御岳道(柏口ルート) …… 15
　　4　柏口金桜神社と社宝 …… 15
　　5　牧丘町内の修験系寺院と神社 …… 17
第3章　調査の方法と成果 …… 19
　第1節　調査の方法 …… 19
　　1　2004年度調査 …… 19
　　2　2005年度調査 …… 19
　第2節　層　序 …… 19
　第3節　遺　構 …… 19
　　1　テラス …… 20
　　2　建物跡 …… 27
　　3　石　組 …… 34

4　石　段 …… 35
5　石　積 …… 36
6　通　路 …… 37
7　その他の遺構 …… 38
8　林道南の遺構群 …… 38
9　尾根上の遺構 …… 38
第4節　遺　物 …… 39
第4章　総　括 …… 45
引用参考文献 …… 48
報告書抄録

挿図目次

図1　周辺の遺跡 …… 6
図2　遺跡周辺の古道 …… 7
図3　御岳道と社寺 …… 8
図4　金桜神社要領図 …… 12
図5　金桜神社と景 …… 13
図6　琴川周辺の山々 …… 14
図7　蔵王権現懸仏 …… 16
図8　遺跡全体図 …… 21・22
図9　グリッド配置図 …… 23
図10　9号テラス …… 25
図11　5号テラス、2号建物跡 …… 29
図12　2号建物跡と遺物出土状況 …… 30
図13　3号建物跡・6号石段 …… 31
図14　4号建物跡 …… 33
図15　5号建物跡 …… 34
図16　1号石段の矢穴 …… 35
図17　尾根上の拝所？ …… 38
図18　遺　物（1） …… 41
図19　遺　物（2） …… 42
図20　遺　物（3） …… 43
図21　遺構の変遷 …… 45
図22　処物群の配置 …… 48

写真目次

写真1　文書調査の様子 …… 1
写真2　3月4日の遺跡見学会 …… 4
写真3　明治期の古絵図 …… 11
写真4　柚口金桜神社の蔵王権現像 …… 17
写真5　米沢山雲峯寺 …… 18
写真6　柚口金桜神社 …… 18
写真7　西側尾根先端の自然礫 …… 38

表目次

表1　地名変遷表 …… 14
表2　土器・陶磁器観察表 …… 44
表3　石製品観察表 …… 44
表4　土製品観察表 …… 44
表5　金属製品観察表 …… 44

写真図版目次

図版1　1：遺跡入り口より見た富士山
2：遺跡入り口より見た小烏山
3：東御殿から小烏山の峯々
4：柚口金桜神社付近から塩ノ山方面を見る
5：石灯篭（左側に「米沢山」）　6：神賀坂
7：琴川沿いの道　8：子の神
図版2　1：青山千坊　2：護摩壇跡
3：烏ノ口橋のアゲマチ　4：柚口金桜神社奥社
5：奥社背後の岩山　6：岩続きの尾根
7：尾根上の拝所？　8：自然の岩窯
図版3　1：東御殿へ続く尾根道
2：東御殿山頂から乾徳山を見る
3：1号テラス　4：2号テラス・1号石積
5：7号石段　6：1号石積　7：7号石段東側
8：23号テラス脇の東沢
図版4　1：2号建物跡（西北より）
2：2号建物跡（西側）
3：2号建物跡遺物出土状況
4：5号石段から南を見る
5：3号石積・5号石段（西南より）
6：3号石積・5号石段（正面）
7：3号石積（西側）　8：3号石積（東側）
図版5　1：3号建物跡（南より）
2：3号建物跡（西北より）
3：3号建物跡（東側敷石）
4：3号建物跡中央に設定した南北トレンチ
5：6号石段
図版6　1：4号建物跡（東より）
2：4号建物跡（南より）
3：4号建物跡調査前
4：4号建物跡調査風景
5：5号建物跡（東より）
6：5号建物跡礎石抜き取りピット
図版7　1：鉄製品出土状況　2：4号石段（南より）
3：4号石段（東より）　4：4号石段上端部
5：1号石組　6：1号石組西側石積状況
7：2号石積（南より）　8：6号石積
図版8　出土遺物

第1章　経　過

第1節　調査の経過

柚口金桜神社奥社地遺跡（以下、奥社地遺跡と略）とは、山梨市牧丘町柚口地内、高天原とも呼ばれる地に所在する金桜神社の旧社地の遺跡で、最上段には奥社の祠が祀られている。金桜神社とは、甲斐金峰山の山頂、五丈岩（蔵王権現）の山宮に対し甲府盆地各地の入山口に里宮として祀られた神社で、金峰山信仰の各地域の拠点といわれ、柚口のほか、山梨市歌田、万力、甲府市御岳などに同名の神社がある。延喜式内社として記載される「金桜神社」が何れを指したものか定かではないが、柚口金桜神社は最も有力視されている。昭和51年（1976）、旧牧丘町史跡として文化財登録され、平成17年の新市移行に伴い山梨市指定史跡とされた。旧牧丘町教育委員会では金峰山信仰調査の一環として平成15年、遺跡の実態解明に取り組むため奥社地遺跡の調査に着手し、新山梨市でも継続事業として平成17年に発掘調査を実施した。

平成15年度

平成15年（2003）、旧牧丘町教育委員会では山岳信仰調査会を発足し、甲斐金峰山の御岳道（里宮と金峰山山宮を結ぶ登拝ルート）のうち牧丘町内を通過する柚口筋と西保筋の道筋調査を開始した。これは御岳道関連の史資料の精査、聞き取り、主に柚口ルートに関する現地調査を目的とするもので、調査会は地元文化財審議委員を委員とし、町教育委員会を事務局とした。委員、事務局は以下のメンバーである。

山岳信仰調査会委員
- 若月昇（牧丘町文化財審議委員会委員長）
- 大村和夫（牧丘町文化財審議委員）
- 古明地式夫（同上）
- 岡謙吾（同上）
- 武井力（同上）

事務局
- 荻原昌郎（牧丘町教育長）
- 武井信治（次長）
- 温井一郎（係長）
- 大崎文裕（文化財担当）

平成15年度の調査会は、4回開催された。

5月10日　山岳信仰調査会の発足、今後の調査方針についての説明。

6月24日　史資料を持ち寄り、調査ルートを確認。

9月5日　若月宇一氏の案内で、御神前燈、神賀坂、青山、護摩坂、おかめ石等、柚口金桜神社周辺の地名、石造物などを確認。

11月4日　二本松、烏ノ口橋のアゲマチ、烏居峠、八十八曲り、石祠、お助け小屋、アコウを踏査し、旧社地とされる二本松周辺および柳平から御室小屋へ向かう道筋を確認。

平成16年度

平成16年には県内学識経験者、研究者を加えて委員を拡大し、報告書刊行を目指して調査会を開催するとともに、奥社地遺跡の測量および一部発掘調査が実施された。調査会の委員は以下のとおりである。

山岳信仰学術調査委員
- 清雲俊元（山梨県文化財保護審議会会長）
- 萩原三雄（山梨文化財研究所所長）
- 末木健（山梨県埋蔵文化財センター次長）
- 新津健（山梨県教育委員会学術文化財課指導監）
- 堀内真（富士吉田市歴史民俗博物館）
- 櫛原功一（山梨文化財研究所）
- 信藤祐仁（甲府市教育委員会）
- 飯島泉（塩山市教育委員会）
- 若月宇一（町内有識者）
- 津野正康（町内有識者）
- 山本正之（金桜神社氏子総代長）
- 高原左門（金桜神社宮司）
- 若月昇（牧丘町文化財審議会）
- 大村和夫（同上）
- 古明地式夫（同上）
- 武井力（同上）

写真1　文書調査の様子

岡利彦（同上）

実施された調査会の内容は以下のとおり。

4月20日　調査員委嘱式。

5月11日　吉山、護摩坂、護摩堂推定地、奥社地道跡の現地踏査。林道南にテラス群が存在することを確認。

6月18日　奥社地遺跡において調査地点の検討。

6月25日　調査状況の視察。

7月17日　調査状況の視察、奥社裏山の岩場踏査。文書・絵図の確認。

8月7日　大弛峠から金峰山山頂、御室小屋、アコウまでの現地踏査。

8月18日　発掘調査の視察。文書、絵図の調査。

9月16日　発掘調査の視察。文書、絵図の調査。

11月18日　発掘調査の報告、遺物観察。

12月22日　調査報告書『調査報告1』配布。2年間にわたる調査内容の総括、今後の調査について討議。

測量・一部発掘調査に関しては、平成16年6月7日から11月30日の間に実施された。7～9月には奥社地の測量・試掘調査が実施され、奥社地周辺の詳細な遺跡全体図の作成とともに、礎石確認作業による建物規模の把握が行われたほか、遺構の年代観を明らかにするため一部試掘調査が実施された。

10月31日には牧丘町教育委員会主催、山梨県考古学協会・東山梨埋蔵文化財担当者会後援で遺跡見学会が開催され、40名ほどの参加者があり、新聞でも報道されて関心を集めた。また12月1日には東山梨郡の文化財審議委員会研修会が牧丘町で開催され、遺跡の見学等が行われた。

12月22日の調査会での報告書配布をもってひとつの区切りとなったが、牧丘町は2005年3月の山梨市・三富村との合併を控え、新市の継続事業として今後も長期的に山岳信仰調査を実施することが課題としてあげられた。また柚口林道下に広がるテラス群についても、山林所有者の了解を得た上で、調査する必要性が指摘された。現地はシートで仮に覆い、今後、再調査がしやすいように配慮することとなった。

平成17年度

本年度は平成17年12月23日から平成18年3月17日を調査期間として、発掘調査および報告書作成が実施された。9号テラスを中心に2・5号テラスに関し、建物群の配置、規模、構造、時期を明らかにするために発掘調査を実施することとなり、平成18年1月11日から2月19日までの間に発掘調査、測量を実施し、併行して整理作業に入り、報告書作成が行われた。

発掘調査中には、修験道遺跡に詳しい山本義孝氏、山岳寺院に詳しい後藤建一氏を現地に迎え、調査状況、周辺地形などを視察していただき、指導を受けた。

3月4日（土）には現地説明会を山梨市教育委員会主催、山梨県考古学協会共催で実施し、中村照人山梨市長をはじめ100名を越す多くの見学者が参加した。

第2節　発掘作業の経過

第1次調査（2004年度）

調査主体　牧丘町教育委員会

調査担当　大崎文裕（牧丘町教育委員会　社会教育係　文化財担当）

事務局　荻原昌郎（教育長、総括）
奥山博文（教育次長）
温井一郎（社会教育係長、編集）
古明地登吉（牧丘町郷土文化館館長）

調査員　保坂邦之・渡邊高潔（(株)昭和測量）

調査参加者　石賀孝典、岩間芳一、河西聡、河東治、木村和夫、小泉勝子、小林信一、小林忠雄、沢村隆志、鈴木靖、中込一、日森一行、早川徹、早川美穂子、平岡治、廣瀬芳仁、深沢洋樹、藤原忠光、藤原昇、堀内賢司、堀内盛美、丸山眞一、三浦眞咲、山田忠

平成15年度の測量・試掘調査は7月14日より9月28日に実施された。調査は奥社地道跡の時代、規模を確認することを目的とし、約4万㎡に関して地形測量が実施されたほか、奥社へ通じる石段、礎石建物跡周辺の清掃発掘、一部試掘調査が行われた。調査報告については渡邊高潔が執筆し、『調査報告Ⅰ』に収められている。

調査経緯は次のとおり（『調査報告Ⅰ』より抜粋）。

2004年6月18日（金）

調査会の現地視察、調査地点の選定。

7月14日（水）～24日（土）

石段の表土除去、遺物実測、取り上げ、写真撮影。9号テラス右積の表土除去、写真撮影。2号建物跡南の石積表土除去、遺物実測、取り上げ、写真撮影。

8月3日（火）～7日（土）

9号テラスの3・4号建物跡付近の表土除去、遺物実測、取り上げ、写真撮影。2号建物跡の表土除去、遺物実測、取り上げ、写真撮影。右組付近の表土除去、写真撮影。6号テラスの調査区設定、表土除去、試掘、遺物実測、取り上げ、写真撮影。

8月23日～9月10日（金）

1号テラス（現奥社前面）表土除去、遺物実測、取り上げ、写真撮影。9号テラス西側の試掘坑設定、掘削、遺物実測、取り上げ、写真撮影。2号建物跡内集

石半裁、遺物実測、取り上げ、写真撮影。2・12・13号テラス調査、遺物実測、取り上げ、写真撮影。

9月28日（火）

1・5・9号テラス写真撮影。3号建物跡の礎石検討、写真撮影。

第2次調査（2005年度）

調査主体　山梨市教育委員会

調査担当　大崎文裕（山梨市教育委員会　社会教育係　文化財担当）

調 査 員　櫛原功一（山梨文化財研究所研究員）

発掘調査参加者　秋山高之助、奥山宗石、櫛原ゆかり、窪田信一、須田泰美、手塚松雄、長谷川規愛、宮川昌蔵、柳本千恵子

調査の経緯は次のとおりである。

2006年1月10日（火）晴

午後、器材を奥社地入り口まで運搬。

1月11日（水）晴

作業初日。器材を調査地点まで運ぶ。テントを9号テラス西側に設営し、器材を収納。トイレ設置。調査予定地の設定。午後より3号建物跡中心部分に南北のトレンチを設定し、掘り下げる。地表下10～20cmの表土が凍結し、掘り下げは容易ではないことがわかる。また9号テラス南面の石積の状況をみるため、4号石段西側に南北トレンチを設け、掘り下げを開始。杭打ちを実施。廃土は全て上蓋に収納することとする。

1月12日（木）晴

石段脇トレンチの掘り下げ。西壁側を深掘りする。土師器片数点、角釘出土。3号建物跡の南北トレンチでは礎石下面で掘り下げを止め、遺構確認を行う。凍結のためトレンチ周辺の全体的な掘り下げは一時断念。

1月13日（金）晴

石段脇トレンチの写真撮影、遺物取り上げ。4号建物跡の礎石を探査。3号建物跡の南北トレンチ完掘、写真撮影。5号石積脇にトレンチを入れ、石積下面まで掘り下げる。3cm程度の炭化材出土。

1月16日（月）曇（やや暖か）

4号建物跡の掘り下げ続行。ベルトを東西に1本残し、全体を礎石上面まで掘り下げることとする。北側では礎石間をつなぐように列石が検出された。5号石積脇の掘り下げ。

1月17日（火）晴（やや暖か）

5号石積南面から剣形鉄製品出土。石積前面の掘り下げはほぼ終了する。4号建物跡の掘り下げ継続。同建物跡東側でピンポールによる探査によって、やや小ぶりの礎石を数個確認し、坪掘りにより礎石上面まで下げる。4号石段上端部の状況を確認するため、トレンチを設定し掘り下げる。9号テラス西側の建物跡推定地をピンポールにより探査し、礎石列の存在を確認（5号建物跡）。

1月18日（水）晴（気温1～2℃で、1日気温が上がらず、寒々しい）

5号建物跡を調査するため、テントを北側へ移動。5号石段上端を完掘。5号建物跡にトレンチ2本を設定し、掘り下げたところ、大型礎石を検出。4号建物跡の精査を継続。

1月19日（木）晴

5号建物跡にトレンチ2本を追加設定し、掘り下げる。西端のトレンチでは礎石を欠失し、確認面で移動痕を確認。南側を半裁し、写真、図化。北側の東西トレンチ内に礎石が並ぶのを確認。

1月20日（金）晴

山本義孝氏現地視察。午前中、案内して山中を歩き、奥社祠上の岩場から北側の尾根筋を踏査。途中に拝所らしき方形石組？など確認。5号建物跡内トレンチ掘り下げ継続。北側に基壇境の列石検出。

1月23日（月）晴（日中でも－4℃とひどく冷え込む）

3号建物跡の礎石配置を確認するため、東側にトレンチを設定し、表土の荒掘りを開始。3号建物跡東側に敷石を確認。敷石上面から瀬美焼の甕片1点出土。遺物取り上げ。5号建物跡内のトレンチ実測。

1月24日（火）晴

3号建物跡内に南北トレンチを2本設定し、南北方向に3本のベルトを残して建物全体を浅く掘り下げることとし、表土の荒掘りを実施。その後、礎石中位面まで精査して礎石を出す。クリの古株の下付近からフイゴ羽口破片、鉄製品出土。出土状況を写真撮影し、遺物を取り上げる。3号建物跡西側から「祥符通宝」1点出土。

1月25日（水）晴

山梨市教育委員会見学。3号建物跡西側の掘り下げ継続。3・5号建物跡内トレンチ実測。

1月26日（木）晴

3号建物跡西側の掘り下げ継続。3号建物跡実測。

1月27日（金）晴

3号建物跡北西の列石延長線上が北側に向かって2列の石列となり、通路の可能性が出てきた。3号建物跡西側掘り下げ継続。3号建物跡の実測。

1月29日（日）晴

午前中、後藤建一氏を各テラスに案内。午後より林道下のテラス群を案内。テラス中に方形の石組があるのを確認。そのほか周辺の山林中を歩き、テラスの分布状況、沢内の方形石組などを見学。

1月30日（月）晴（日中6℃とやや暖かい）

3号建物跡西側の列石が北側に続くため、坪掘りによって探る。3号建物跡の礎石精査、実測。2号建物跡の再調査のため、シートを剥ぎ、前回の廃土を移動。

1月31日（火）小雨（午前中で中止）

2号建物跡西側の再調査。3号建物跡の列石の続きが石段状になり、北側テラスへ上る石段の可能性が濃厚となる（6号石段）。3号建物跡の実測。

2月1日（水）雨（中止）

2月2日（木）晴

前日降った雨水の排水。3号建物跡の実測を継続。6号石段を追う。2号建物跡西側の再調査。新たな礎石、礎石をつなぐ石列などを検出する。また江戸時代の陶磁器類も出土。1号建物跡の清掃。

2月3日（金）晴（風強く、枝がときどき落ちる）

6号石段の掘り下げを行い、清掃、写真撮影。2号建物跡西側の掘り下げを終了し、全体の清掃、写真撮影、遺物上げ。4号石段、3号石積の清掃、写真撮影。1号建物跡の写真撮影。1号石組の清掃、写真撮影。3・4号建物跡の実測。

2月6日（月）曇（日中0℃程度と寒い）

調査区全体の清掃、写真撮影を行う。本日にて掘削作業は終了とする。

2月7日（火）雪のち雨、曇（林の中ではさほど積雪はない）

2号建物跡西側の平面実測。

2月8日（水）晴

3号建物跡の断面図5本作成。4号建物跡の平面図実測。11号テラス西側、尾根先端の礫集中区周辺の表土を剥ぎ、調査。

2月9日（木）晴

5号建物跡断面図3本実測。3号建物跡平面図修正。清掃後、ポールによる高所からの部分撮影を遺構各地点で実施。清雲俊元氏見学。テントを解体し、下ろす。

写真2　3月4日の遺跡見学会

2月10日（金）晴

4号建物跡の断面図、5号石積立面図など作成。6号石段実測。荷物を一部降ろす。

2月11日（土）晴

6号石段平面図、断面図作成。4号建物跡ほかの未実測部分の図化。3号建物跡西側列石の断面図作成。荷物のほとんどを下ろす。

2月15日（水）晴

補足調査。4号建物跡付近の実測など。

2月18日（土）晴

補足調査。9号テラス南北エレベーション作成。6号石積実測ほか。

2月19日（日）晴

補足調査。1号石積実測。9号テラス東西エレベーション作図。図面修正など。

3月4日（土）晴

山梨市教育委員会主催、山梨県考古学協会共催により10時より12時まで、一般向けの現地説明会を実施したところ、約100名が参加。CATVの撮影。午後より土嚢袋を礎石間に敷き詰め、埋め戻しを行う。また同日、山梨日日新聞にて報道。

3月6日（月）

埋め戻し作業完了。

第3節　整理等作業の経緯

2004年度

現地での調査終了後、事務局の温井を中心に報告書の編集作業が進められ、2004年12月22日の調査会議において『調査報告Ⅰ』が配布された。その内容は、山岳信仰の概要、道筋の推定と現状、金桜神社奥社地調査と周辺史跡調査、今後の調査と保護管理、調査経過の5章構成としてまとめられ、遺跡全体図、調査地点の遺構実測図、遺構写真のほか、柚口地区の古絵図、柚口金桜神社所蔵の蔵王権現像ほかの関連写真が掲載されている。出土遺物に関しては洗浄、注記、接合作業まで牧丘町教育委員会によって実施されたが、遺物は未実測であった。その後、2005年5月、『山梨県考古学協会誌』15号において拙原は大崎と連名で調査概要とともに遺物実測図を掲載し、若干の考察を加えて論考した。

2005年度

現場作業と併行して図面整理を行うとともに、2006年2月13日より遺物洗浄、実測作業を開始し、原稿執筆、遺物写真撮影などを実施した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

柚口金桜神社奥社地遺跡は山梨市牧丘町柚口地内に所在し、笛吹川上流、琴川左岸の東御殿（標高1487m）西麓、標高1000～1070m付近に位置する。車では山梨市牧丘町窪平方面から柚口地内へ向かい、雲峯（峰）寺、柚口金桜神社脇の道を進む。琴川にかかる鳥ノ口橋を渡り、棚平へ抜ける柚口林道（クリスタルライン）を横から1.1km進んだところに林道塩平徳和線（未完成）との分岐点があり、奥社地遺跡の説明板（新旧２枚あり）と鉄製の鳥居（昭和51年建立）が立つ地点が遺跡入り口である。鳥居から数百m進んだ山中に金桜神社奥社の祠があり、鳥居付近から奥社までの間が本遺跡の広がりとなっている。

遺跡の東脇には細い沢（東沢）が流れ、沢の対岸には東御殿から張り出したひとつの尾根が視界を大きくさえぎっている。

北側は奥社祠の背面が岩場の急斜面となり、その先の岩場が連続した細い尾根を辿っていくと東御殿に通じる尾根道に至る。尾根の北側には大烏山を経て奥千丈などの峰々が続き、金峰山の頂へと連続した奥秩父の山塊となる。また南へ尾根を下ると東御殿、大久保峠を経て牧丘町弘伝の日吉山王神社方面に至る。

遺跡西側は低い尾根が南へ向かってのび、遺跡の範囲を区切る境界となっている。さらに尾根を越えた西には西沢をはさんで小烏山がそびえている。

それらの山々や尾根に北、東、西の３方を囲まれるようにして、南に開けた緩斜面が奥社地遺跡の空間である。東西約100m、南北約200mの細長い空間で、中央、東沢寄りには石積、石段を伴うテラスがあり（５号テラス）、奥社地を代表する遺構として知られてきた。遺跡一帯は県有林の恩賜林で、植林された杉、檜からなる水源涵養林となっていて、現状では暗く苔むした山林である。

平成15年の調査では、柚口林道を挟んで南側、琴川に近い山林中に石積で区画された広いテラス群があることが確認され、石組等も発見されている。発掘調査を実施していないので時代は不明であるが、石積の状況では奥社地遺跡と大差なく、関連があるとみられている。僧房跡の可能性もあり、奥社地関連の遺構はさらに広範囲に及ぶようである。

琴川左岸には、金峰山、奥千丈方面から牧丘町室伏に向かって東西に尾根が伸びている。遺跡周辺の山々を北側からあげるならば、最も特徴的で遠方から容易に識別できる山として大烏山（標高1780m）がある。西側が岩場となってえぐれたように見え、甲州市塩山方面からも遠望できる。大烏山の南西には雛岩（ヒゲナ岩）、サンゴウ岩と呼ばれる岩場がある。雛岩は室伏の日吉山王神社の山宮とされ、祭神は猿田彦命とされる。江戸時代、雲峯寺の中興の祖雲居禅師が参禅した場所ともいわれ、『奥秩父』（原1935）には、岩の中途には八畳敷ほどの岩屋があり、「中には二尺に三尺くらいの水溜もあり、よほど古く人のすんだ跡があるそうだ」と記されている。

大烏山の手前には、低いながらも三角錐形に鋭く尖った神奈備形の小烏山（1390m）があり、遺跡西側に位置する。山頂に至る尾根道は遺跡西方の西沢脇を北へ登るルートとなる。明治期と考えられる古絵図には「大門下り」、「堂の上」という道名が小烏山東側に記されている。山頂にはとくに人工的な造成面や祠はない。

大烏山から尾根続きに南東へ下ると馬止根場（うまどめこんば）、西御殿のハピークを経て、東御殿（1487m）に至る。東御殿は遺跡東北側、背後の峠にあたり、丸く盛り上がった山容をもち、奥社地遺跡背後の尾根の中では最も高いピークをもつ。山頂は平担で、人為的に整地されたようにも見られる。祠はない。山頂は360度の展望が開けている。南正面には富士山がそびえ、眼下に甲府盆地東側を望み、北側には乾徳山から黒金山が間近に迫り、南西側には琴川の谷を隔てて小楢山がある。明治時代の地図には、東御殿に相当すると思われる山名に「石膳天狗山」とあり、山論の古文書等に「犬狗山」と出てくるのがこの山に相当するかと思われる。天狗山という名称が付けられた理由として、天狗社が祀られていた可能性が高いが、それ以前に鷲の奥社地との関連性で、山頂や周辺尾根が修験者によって利用されていた可能性を暗示している。雲峯寺の山号、「米沢山」から想像すると天狗山が米沢山であって、信仰の山であったのではないだろうか。

大烏山から大久保山にかけての峰々はかつて「中牧山」とも呼ばれ、「甲斐国志」「中牧山」の項には、大久保山から東に小鼓巣、大鼓巣などの山名が列記される中で、大久保山と小鼓巣（烏）の間に「米沢山」がある。その間の山としては東御殿がもっともはっきりした山容をもつことから、東御殿が米沢山であった可能性がある。康和５年の柏尾山経筒銘文中には「山東

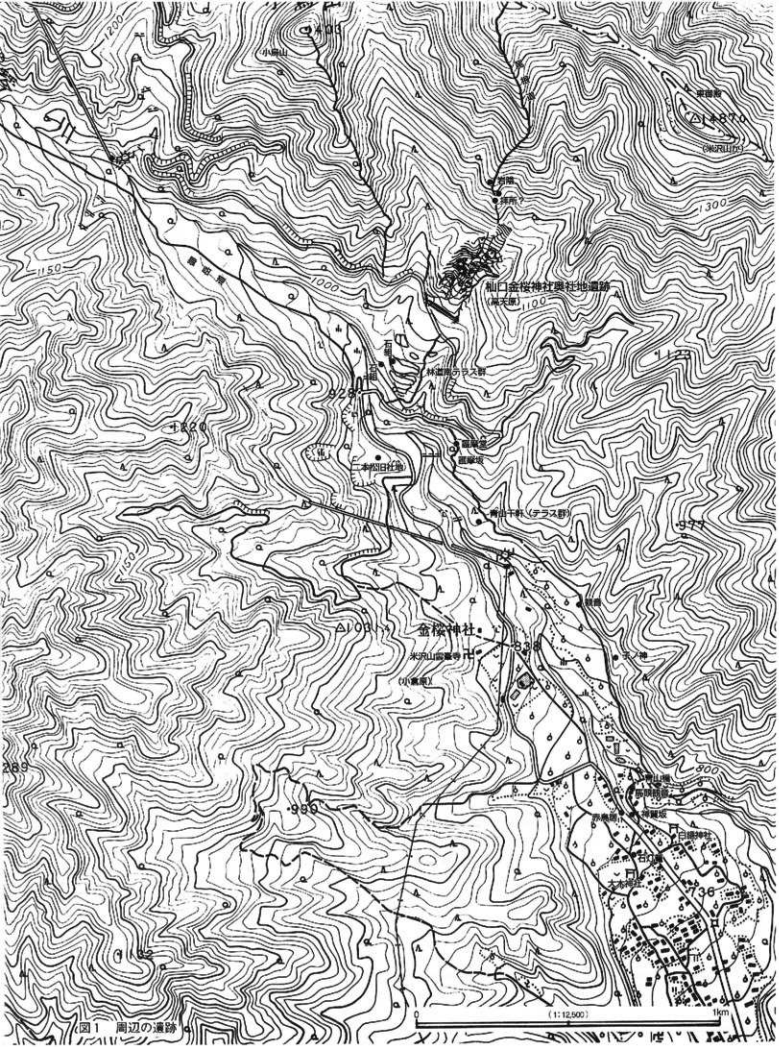


図1　周辺の遺跡

図2　遺跡周辺の古道（御岳道・鎌倉街道）

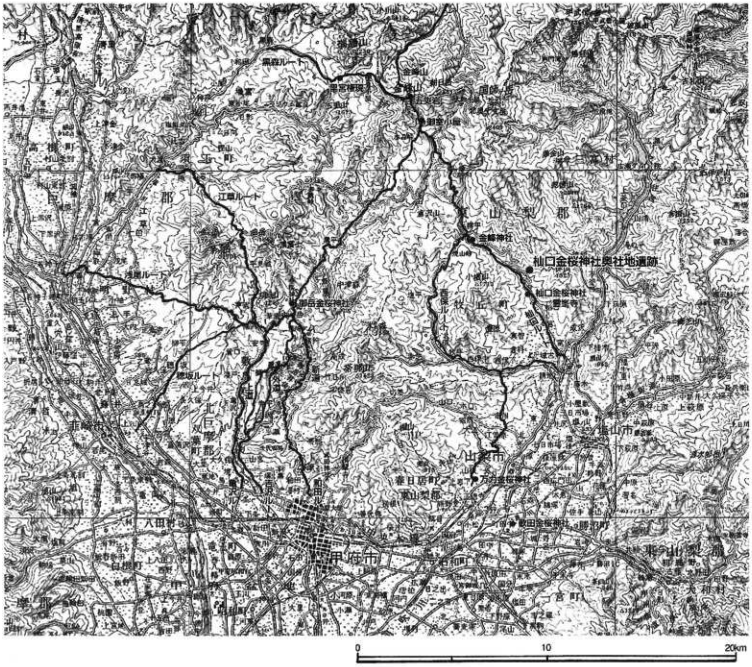


図3　御岳道と社寺

郡内牧山村米沢寺」とあり、山梨郡東部、中世に牧庄といわれた牧丘周辺にある柚口雲峯寺の山号が米沢山であることから、「米沢」が柚口周辺であることは、これまで先学によって指摘されているとおりである。勝沼大善寺が「柏尾山寺」といわれたことからすると「米沢寺」は米沢山麓にある寺、米沢山寺という意味あいの名称であった可能性があり、「米沢」は山名とみるのが自然であろう。また文面の「内牧山村」とは、『甲斐国志』等にみられる「中牧山」という地名に注目するならば、「内」を同義の「中」に置き換えると「中牧山村」となり、より明確に米沢山の地を記した名称となる。現状では米沢山の峰の確定には至っておらず、文書史料などの精査が引き続き必要で、奥社地遺跡の理解を深める意味でも、今日、経筒銘にある「米沢」の地名確定作業は急務といえる。

さて、東御殿からさらに南東へ下ると牧丘町乙カ妻と徳和をつなぐ大久保峠に至り、さらに尾根を下ると牧丘町室伏へ到達する。尾根先端にあるのが日吉山王神社で、先述したように大鳥山の雛岩が山宮といわれている。日吉山王神社の東側には近接して石窟山林栄寺がある（現在は廃寺）。山号のいわれとなった石窟については未確認であるが、室伏地内の妙見山中には窟があるとされ、かつては4月4日に祭礼が実施されていた。「室伏」という地名は諸説あり、山伏に対し

て里にいる修験者、という意味とする説のほか、修験者が籠もった室（石室、石窟など）があった地という解釈もある。このように室伏から大烏山、さらに金峰山へ至る尾根筋は、山本義孝氏も指摘するように、かつて修験や信仰の道筋であったことが伺える。

第２節　歴史的環境

１　甲斐金峰山信仰の研究史

甲斐国内の山岳修験および甲斐金峰山の信仰については、清雲俊元氏の「甲斐金峰山と修験道」が基本文献とされる（清雲1978）。清雲氏は、勝沼町白山平発見の康和５年（1103）経筒文面の「山東郡内牧山村米沢寺」を米沢山雲峯寺（大禅寺）に想定し、天台宗との関連性を指摘するとともに、『甲斐国志』等をもとに御岳金桜神社、大善寺、円楽寺、矢高山、大祥寺、窪八幡神社などを取り上げ、修験との関わりを概説した。

長野県側から金峰山信仰を捉えたものに、小柳義男氏の五丈岩周辺採集遺物からの考古学的考察があり、山岳信仰の解明に考古学的手法がきわめて有効であることを示した（小柳1983）。千曲川上流にあたる長野県川上村では、村誌編纂事業にともなって1993年には学術調査を行い、旧鳥居周辺の宿坊と考えられる地点の成果を公表している（島田1994）。小柳氏の報告に影響を受け、甲斐丘陵考古学研究会でも五丈岩周辺で数度の採集活動を行い、その成果として1994年に櫛原らは数珠玉、経筒外容器、土馬、金銅製円板などの信仰遺物を報告し、10世紀代から近世に至る金峰山信仰の変化を推察するとともに、甲州文庫蔵『金峯山縁起』の存在に注目した（櫛原・岡野1994）。

近年、明野村（現北杜市明野町）深山田遺跡の調査成果と茅ヶ岳信仰、御岳金桜神社との関連性から紐解いて、金峰山信仰の再構築を試みたのは山本義孝氏である（山本2002b）。氏は『甲斐国志』など近世史料をもとに形成された従来の金峰山信仰のイメージを中世的な視点で捉え直す必要性を説き、近世以前の修験のあり方を探った。そこでは近世以降の大衆化された入峰ルートが主に沢筋を通るのに対し尾根道が本来のルートであること、金峰山信仰を一国内の主要な峰々を渡る「国峰」という視点で理解する必要性、五所権現、七所権現など独特な権現祭祀の存在などを指摘した。『甲斐国志』に大きく依拠してきたこれまでの研究に見直しを迫るとともに、初めて全国的な視野で甲斐の修験道を捉えようとしたもので、そこには推察を交えながらも幾多の新たな課題が提示され、今後の指針をきわめて明確に示したものとして高く評価される。

２　杣口金桜神社と米沢山雲峯寺

ここでは杣口金桜神社と米沢山雲峯寺に関する文献、文書、絵図資料、金石文史料を年代順に提示する。

①柏尾経塚出土の康和５年在銘経筒

昭和37年（1962）、旧勝沼町（甲州市勝沼）柏尾山の白山平で鉄管設置工事の折に偶然発見された経筒（国指定重要文化財）には、783文字からなる銘文がある。それによれば山城国乙訓郡石上村出生の勧進聖寂円が63歳で出家したのち、康和２年（1099）正月頃から「甲斐国山東郡内牧山村米沢寺千手観音宝前籠居」し、如法経を書写することを発願、４年後の康和５年（1103）に満願した。同年３月24日、「行程一時余間」隔てた「柏尾山寺往生院仏前」に移動し、４月３日に「山院主睿山学者堯範」により開講演説が行われ、同月22日「同山東土白山妙里之峯」に埋納された。その部分を以下に抜書きする。

「（前略）以去康和二年正月之比、同州東海道甲斐国山東郡内牧山村米沢寺千手観音宝前籠居し天、妙経於如法書写之発心企天、四歳於送間、敢无障相事し天書写之念願満せり。仍尋諸仏結跏之砌於、撰万法流浦勝地於、同五年三月廿四日癸卯誘道俗男女於、引貴賤上下、柏尾山寺往生院仏前ニ奉伝渡。其行程一時余間、立並る結縁衆路頭ニ无隙かりき。同四月三日辛亥嘱当山院主睿山学者堯範奉天、開講演説畢。移法会之刀利之様、不異荘厳法浄世界ニ者。同月廿二日庚午同山東土白山妙里之峯所奉埋納也。（後略）」

文末には「当時正朝。同時国司藤原朝臣。結縁中ニも其日供具頭散位藤原基清朝。百種湯薬僧頼暹。奉造作勤井上房。古本奉仕佐伯景房。惣行事散位三枝宿禰守定。同守継。僧正久。同覚禅。権介守清。自余同前也。紀忠末。筆者正六位上文屋重行。」と関係者等の名前が列記されている。

この内容については磯貝正義氏、清雲氏らによって十分検討が加えられ、「牧山村米沢寺」は旧牧丘町杣口所在の米沢山雲峯寺のことではないかと推定されたが、磯貝氏は杣口から大善寺までが「行程一時余」よりも離れすぎていることから、にわかに断定できないと慎重である。磯貝氏は「柏尾山寺往生院」が柏尾山大善寺の旧本堂の西明寺に該当し、院主が比叡山で学んだ経歴をもつことから天台宗寺院と考え、清雲氏は雲峯寺についても天台系寺院であったと推定する。注目されるのは「千手観音宝前」で、「米沢寺」には千手観音を祀る仏堂（千手観音堂）が存在したことになる。また「佐伯景房」なる人物が寂円に以前より奉仕していたことがわかり、米沢寺からの世話人であったことが読み取れる。

なお前述したように、「山東郡内牧山村米沢寺」とは従来「牧山村」という村名として解釈されてきたが、「中」を「内」の誤写とすれば「中牧山村」の「米沢寺」という意になる。

②供養塔　（寛文７年＝1667、大和２年＝1682）、三界万霊塔（延宝２＝1673）

石造物として、二本松旧社地の西幅に2基の石塔がある。開山金嶽祖牛大和尚と月林明證信女の供養塔である。文面は次の通り。

「慈林□」上座　霊位／月林明證信女／寛文七年未七月八日遷去　行年五才」（寛文７年＝1667）

「天和二年壬戌白／當寺開山金嶽祖牛大和尚／三月二十六日」（天和２年＝1682）

金嶽祖牛大和尚は、雲居国師の次の住職で、開山とされる。金嶽とは金峰山のことかと思われ、修験系の人物とも思われる。両方とも後世の供養塔と考えられ、年号が示す時点での建立よりは後出のものであろう。

また柚口地内、通称御勝手で昭和43年頃、柚口林道新設時に、「延宝二甲寅歳／三界万霊／六月良辰　関室書」（延宝2＝1673）と記された、高さ約２mの三界万霊塔が掘り出されている（大村2004）。

③鰐口（延宝元＝1673）

金桜神社の鰐口には、「甲州柚口村米沢山雲峯禅寺／延宝元発卫／六巳吉日／檪現堂鰐口世施主祖透」（延宝元＝1673）の刻銘がある。

④詠歌（宝暦９年＝1759）

「奉納米沢山蔵王権現御宝前　詠桜和歌九首」という、願主柚口村吟露による宝暦９年（1759）３月の奉納和歌がある。以下に全文を掲げる。

「奉納米沢山蔵王権現御宝前

詠桜和歌九首

今も猶　むかしの跡をしるへにて
　またたつねん人る　米沢のさと
よね沢の　峯のさくらや　咲きぬらん
　ふもとのさとに　匂ふはるかせ
しら雪の　ふりしく時は　米さわの
　山した風に　はなそちりける
米さはの　山辺にさける　さくら花
　雪あとのみそ　あやまたれたる
また散らぬ　桜なりけり　古郷の
　米沢やまの　峯のしらゆき
よね沢の　花のさかりと　知りなから
　猶しらゆきと　あやまたれぬる
天のはら　雲間もみえす　ふる雪の
　幾日ともなき　よね沢のやま
いにしへの　代々の御幸の　跡ふるく
　美しくたかき　米さわのやま
名に高き　よね沢山の　花よりや
　ゆきにさくらを　まいてそめなん

千鶴万亀

願主　　柚口村　吟露

宝暦九己卯歳弥生吉日」（一部判読不明、推定）

第１首、「米沢のさと」は金桜神社が所在する柚口小倉原のことか。第５首、「米沢やま」とは中牧山中の米沢山のこと。第７首、「天のはら」とは「高天原」と呼ばれる奥社地をさす。「幾日」とは「幾日の峯」と呼ばれた金峰山とのかけことばか。第８首、「いにしへの代々の御幸」とは毎年旧暦３月11日に行われた蔵王権現大祭の御幸のことか。この奉納和歌も大祭に際して詠まれたものであろう。これらの歌からわかるのは、「米沢山」を「よねざわやま」と発音すること、金桜神社周辺を米沢の里というのに対し、はるかに高いひとつの峯をさして米沢山と呼称している点である。

⑤村絵図（寛政４年＝1792）

寛政４年の柚口村の個々の家々を示した絵図には、現柚口金桜神社、雲峯寺の位置に建物が描かれ、現在地点に既に両寺社が存在したことが明らかである。

⑥『甲斐国志』「蔵王権現」（文化11年＝1814）

「地ヲ米沢ト称ス村記ニ云金峯山ノ里宮ナリ古ヘハ金桜ノ神社トテ大社ナリシガ何レ頃カ焼燬シテ臨済宗雲峯寺ノ境内ト為リ蔵王権現及ビ子守・勝手ノ両祠寺中ニ在ス又今ニ青山千坊・東谷・西谷・神願坂・飯関・帯締川・帯化石・鳥居嶺・三十八末社等ノ遺跡アリ此所ヨリ金峯山ヘ道程七里余又南方富士路黒駒ニ達スルヲ道者海道トテ甲和州吉野ニ皇居アリシ頃ハ請国ノ山伏此ノ金峯山ニテ修行セシ由云ヒ伝フ」と米沢の地名のほか、関連する旧跡を挙げ、南北朝期の繁栄ぶりを伝えている。ここでいう蔵王権現の地、米沢とは、現在の柚口金桜神社の所在地（小倉原）で、金桜神社の廃絶時期については不明とされる。

⑦『甲斐国志』「米沢山雲峯寺」

「同宗京都妙心寺ノ末除地一段六畝廿歩仏ヘ云フ智証大師ノ草創ナリ雲居禅師ノ法衣・鉢盂ヲ寺宝トス」と記すのみである。

⑧『甲斐国志』「中牧山」

「大窪山ノ西北ニ連ナレリ中牧諸村ヨリ人リ会フユエ山ノ名トス西保ニテ此ノ山奥ヲ東奥御丈ヲ山界東ハ大窪山ヨリ大石堂山・米沢山・小殿巣・御殿・大殿巣・櫛岩等、琴川・水落ノ峯ヲ限リ西ハ小俣嶺・鳥居嶺・南ハ中牧組入会ナリ」とあり、中牧諸村入会の山々の総称として「中牧山」と呼ばれていた。したが

って「中牧山」というピークをもつ山は存在しない（ただし明治36年「中牧神社之景」には東御殿付近の位置に「中牧山」として図示されている）。注目すべきは「米沢山」の存在で、現在その山名をもつ山はないが、地図上で大久保山から順に追っていくと、「米沢山」は小鳥山の手前、東御殿に相当する可能性がある。

⑨『甲斐国志』「琴川」

「一名帯締川（中略）又帯締川ト云ハ昔ハ金峯ヘ登拝ノ道士此川ニ沐浴シテ帯ヌ放ニ名トス河辺ニ帯仕石アリト云リ」とあり、現青山橋下流30mくらいにあったという帯仕石のことを伝えている。あるいは現在、おかめ石とされる石は、帯仕石からの転訛であろうか。

⑩『寺記』「霊峯寺」（慶応４年＝1868）

やや長くなるが引用する。

「一、当山者往古天台宗而仁寿年中開山智証円珍大師之道場也時ニ智証大師冠り勅宣ヲ和州金峯山蔵王権現ヲ此地ニ勧請シ当山ノ鎮守ト奉リ称シ右権現鎮座ノ境地ハ米沢ト申所ニテ雲深ク峯高シ隔リ里ヲ既ホ弐里余之場所ニ御座候依テ山寺号米沢山雲峯寺ト唱ヘ則チ勅願所ノ古跡也ト今ニ云伝へ申候尤証書之類ハ一切無御座候

一、天正年中ノ頃火災ホ罹リ諸堂大半炎焼致シ候儘星霜ヲ経テ凡六十余年慶安年中京都妙心寺末ホ奥州松島瑞巌寺中興開山勅諡大悲円満国師此地ニ来リ其深山幽谷成ヲ見テ実ニ人跡不到之場所故乎遠カ近里之二本松ト申ス所へ寺地ヲ替テ悉造営智証大師之霊像ヲ安置シ且蔵王権現之霊祠ヲ移シ旧跡ノ霊場ニ等シキ也是ヨリ京都妙心寺末而開山ヲ大悲円満国師ヲ改ム其後開山ハ奥州へ飯国被欲候申ス事故へ当山ニハ塔所無御座候　其後寛文十戌年三月十二日炎焼シ同十二子年冬再び造営（中略）

一、其後正徳二辰年四月今ノ小倉原之芝間当山ト替地仕リ諸堂共引移シ（後略）」

このように霊峯寺が勅願所であったという伝承、天正年中の火災のこと、江戸時代の変遷について詳細に記されている。この後に作成された各種記述の元とされた史料と思われ、後の史料では若干の混乱がある。

⑪絵図（年代不詳、明治時代）

柚口周辺の山を中心に示した図で（写真３）、年代不詳ではあるが図中に「官林」という用語が記入されていることから明治時代と思われる。それには個々の沢、山、道等に名称が記され、奥社地周辺には朱墨による道の脇に「大門下り」、「堂の上」といった注目すべき名称が付記されている。奥社地西側の山道は「大門下り」、奥社地北側の山道は「堂の上」とされ、遺跡との位置関係で付けられた名称と思われ、注目される。

⑫『米澤山蔵王権現略御縁起』（明治４年＝1871）

12丁の刷物で、水上源七ほか２名の世話人によって製作された。前半部分は、宿恵少将と阿古田丸、龍女御前の話、後半部分に「米沢三十八社」のいわれや、智証大師円珍が大和の蔵王権現を米沢の地へ仁寿２年（852）に勧請したこと、天正10年４月上旬に信長勢による焼き討ちを受け焼失し、大悲円満国師が社地を吉野平へ移し、元の地を高天原とよぶようになったこと、寛文５年２月下旬に焼け、小倉の地へ遷宮し、吉野平を二本松としたことなどが記されている。ここに初めて信長焼き討ちの話が登場している。その中に注目すべき伝えがある。

「（前略）末社三十八末社と申て、柚口に三十八宮有り。光明真言一万経ヲ埋おく塚三十八塚有と言共、略書にしるし尽しかたし。（後略）」

三十八末社については史料⑥にもみられ、柚口周辺の大木神社、樵神社、白鬚神社などを指すと思われるが、不明。

⑬『金桜神社由緒取調書』（明治27年＝1894）

仁寿元年三月吉日、円珍大阿闍梨が吉野の金峯山よ

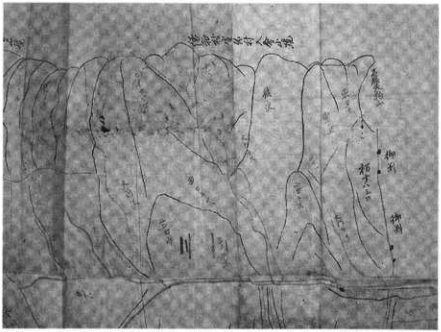


写真３　明治期の古絵図（部分、「堂ノ上」「大門下り」が朱書きされている。）

り当所へ勧請したことのほか、以下の文が記載されている。

「仁寿年間初メテ本社ヲ同村御料林ノ内（元入会山）字柚口小字高天原ニ築キ守護ノ為メ米澤山大禅寺ヲ開創セリ其規模頗ル洪大ニシテ造営最モ美ヲ極メタリシカ人皇百五代正親天皇ノ御宇天正十年四月将軍織田存府兵士川尻鎮吉ニ命シテ之ヲ焼失セシム堂塔五十八棟及古器重寶潰滅ス幸ニシテ神殿ノミ恙ナキヲ得タリ以来哀願又旧時ノ観ナシ寛永年間大悲門満国師来リ五ヶ村宿老ト図リ小字古野原ニ再建築ス其後正徳ニ年雲峰寺住職竜翁和尚深山ナルヲ嘆キ五ヶ村宿老ト図リ亦之レヲ遷ス即チ現在地ニシテ宮殿拝殿ノ建築ヲ得タリ（中略）附記往古及中古ノ建築ハ独リ古老ノ伝ニヨリ知ル難モ旧跡ハ高天原ニ礎石七ヶ所古野原ニ同六ヶ所現存セリ尚当時ノ盛大ヲ追想スルニ足ル」

「米澤山大禅寺」という具体的な寺院名、織田勢による焼き討ちのこと、「堂塔五十八棟」の伝え、江戸時代の変遷などが記されている。また礎石（礎石のことか）についての付記は興味深い。

⑭「諏訪村小字小倉山　金桜神社要領図」（明治28年＝1895、佐藤行昌製図）

おそらく明治27年提出の『金桜神社由緒取調書』付図かと思われ、現在の柚口雲峯寺、金桜神社の旧寺社跡等を示した図である（図4）。柚口金桜神社上には現二本松に堂跡が示され、琴川を赤鳥居で左岸に渡ると「字青山畑」（青山千坊）、「護摩坂」、「護摩堂跡」があり、道をはさんで上側の「字高天原」に大小10面のテラスの配置図が描かれ、道下には4面のテラスが示されている。そこには石段、テラスの段を示す表現があり、遺跡平面図と比較すると類似性が認められ、興味深い。当時、道下のテラス群についても金桜神社関連の場所として理解されていたことがわかる。

⑮日本社寺明鑑発行所版「金桜神社之景」（明治36年＝1903）

金桜神社現社地から奥社地にかけての細密画とともに帯仕石、子ノ神、護摩坂、五十五石段、東谷、西谷、往古ノ社跡、高天ヶ原、勝手社、子守旧跡、鍛閻、中古ノ社跡二本松等の地名、社名を絵図中に記す（図6）。また説明文には次のようにある。

「社紀云抑本社者為本州之北鎮金峰山金桜神社之里宮也、欽明天皇元年庚申二月始而行祭祀云々、年内祭祀之内三月十一日者大祭也、子酉川辺隼之地ニ宮奉行神輿行幸大麻宮刷ニ納、明治維新来五ヶ村柚口、千野々宮、城古寺、窪平、請地、隼之者斎戒神輿行幸供

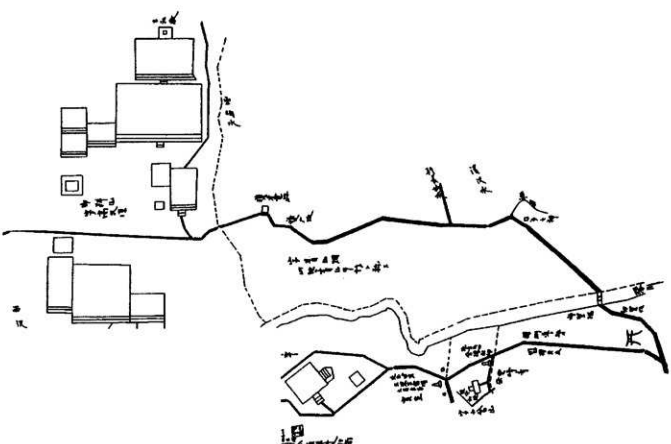


図4　金桜神社要領図（明治28年）

奉　沿革創祀ハ高天ヶ原ニテ上古ハ猿トシテ考証ノ存スベキモノナシ、中古仁寿年間天台僧智證大師神ノ坊創立来至近古ニ社人水上某共ニ奉仕当時頗ル大社タリ、遺址ニ礎石数十階ノ石段二ヶ所傍ニ子ノ神社西谷東谷護摩坂青山千軒等社人社僧ノ旧跡存ス、後古野平ノ地ニ遷祀ス此所ニモ遺址ニ社及社人社僧等ノ旧跡、傍ニ子守勝手ノ二社、二本ノ遺松樹現存ス、正徳年間現今ノ小倉山ニ遷祀ス、社頭ノ傍ニ存ル神木桜樹ハ金桜ト云フ、地名ニ神貿飯関社東ニ帯締川帯仕石アリ、往昔ハ諸国ノ山伏南方富士街道ヨリ来リ、比川ニテ清浄本社ニ参籠登山スト云フ」

神ノ坊という名称、五十五石段等、新知見が含まれる点、興味深い。

⑯「東山梨郡誌」「米澤山雲峯寺」（大正５年＝1916）

「臨済宗、柚口小字小倉原に在り、釈迦如来を本尊とす。初め天台宗にして仁寿元辛申年、文徳帝叡山列祖円珍智証大師を帰崇し、地を甲斐国東山梨郡旧柚口入会山中、高原と云いへる所に相し、雲峯寺を開創せしむ。依りて大和国金桜蔵王権現を勧進当寺鎮守として分祠し、宝祚延長、国家泰平の祈願所と為させ給う。当時伽藍壮麗、堂塔棟数五十八ヶ所、其他塔頭十ヶ院、修験五ヶ院、行者二軒、鎮守神殿、本地持仏堂、仁王門、末社等屹列厳然たる、峡中の一名刹たりしと云う。然るに天正十年織田氏の兵、武田氏を討伐の際、兵災に罹り、堂塔伽藍中末社神仏像に至る迄、悉皆灰燼に帰し、唯蔵王大権現、子守明神、勝手明神の神体のみ焼け残り、今に神殿に安置せり。爾後同入会山中字二本松に移して、重て今の小倉原に移す。開創以来数百年間の事蹟は、古記烏有に帰したる為め詳かならざれども、其臨済宗妙心寺に属せしは寛文年中雲居国師当山に歴住の時なりと伝へられる。国師の法嗣金嶺祖牛禅師次で往持し、当山に示寂塔所あり、因て金嶺和尚を開山と称す。開山以来富永牧禅に至る十三世にして、創立以来殆ど一千余年なり。牧禅師先年示寂以来無住となれり」

このように寺史についての記述があり、とりわけ旧伽藍の堂塔数についての詳細な記載は、引用史料が不明ではあるものの注目される内容である。

⑰原全教『奥秩父』（昭和10年＝1935）

原全教著『奥秩父』（原1935）には、当時の古老からの伝聞などが多数記載されている。その中から奥社地周辺の地名について拾うと、「青山千坊」については「昔（吉野朝とも云ふ）こゝに御師の家が千軒あり、その筆頭をセンガ大霊或はセンガ取締役とも稱し、い

図５　金桜神社之景

つの時代か柚口の水上源七と云ふ人がその役についていた事もあつたと云ふ。（中略）こゝで入山の山伏から山役銭即ち入山料を徴収して許可したり、或は制止したりしたものであると云ふ。」と、関所的な場であったような伝えを載せている。「米澤山」については「「米」は後述の琴川上流の八十八曲の「八十八」の合字、「澤山」は先に述べた琴川源流の総称（後略）」という、地名の起源についての解釈を記す。「護摩堂（ゴマンドウ）」については「昔、入山者がこゝで護摩を焚いて通つた遺跡であると伝えている。また弘法大師の滞在されたのはこゝであるとも謂ふ。（中略）西澤、その出合の平地が高天原であり、こゝには余程古い寺跡と板碑があるそうだ。」とある。板碑については古代文字とされる石碑のことかと思われるが、いわゆる板碑ではない。

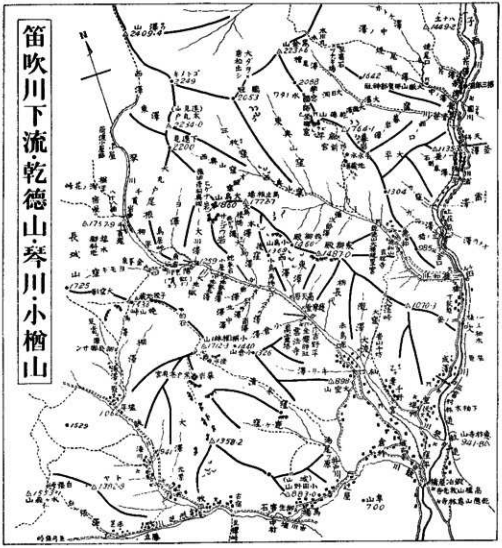


図6　琴川周辺の山々（原全教『奥秩父』より）

⑱『牧丘町誌』「金桜神社奥社地跡」（昭和55年＝1980）

『甲斐国志』、『社記』等の史料を踏襲した説明のほか、古代文字と伝えられる矢来文字形式の碑の存在、「マン字組方式による土台石」などが残っていることを記すが、矢来文字とみた石碑は、裏面に近世以降の矢穴の残る割り石で、表面には自然のヒビが生じて刻書のように見えるものである。マン字組の土台石とは何を指しているのか不明。

そのほか、牧丘町内の保管絵図として、柚口集落を図示したもの2枚、鳥居峠から金峰山五丈岩までを描いたもの2枚等が知られている。また若干の関連文書

表1　地名変遷表

資料番号	資料名	年代	高天原	高原	大神寺	神ノ辻	五十六石渡	青山千坊	青山畑	護摩坂	護摩堂	米谷	東沢	四沢	神貿（坂）	神貿峯	飯岡	曲輪川	骨仕石	子ノ神	二十八本杉	吉野原	吉野平	一本松	子守・勝手（社）	小倉岩	小倉山（峯）
⑭	『甲斐国志』『社記』	1814					○				○		○		○		○	○	○	○							
⑮	『寺志』『寒峯寺』	1868																								○	
⑯	『米澤山歳子権現略御縁起』	1871						○													○		○	○			○
⑰	『金桜神社古蹟取調書』	1894	○		○																	○					
⑱	『金桜神社境内絵図』	1895	○					○		○	○			○													
⑲	『金桜神社之景』	1903	○			○	○		○			○			○		○	○	○	○	○		○	○	○		○
⑳	『東山梨郡誌』『米澤山雲峯寺』	1916		○																					○	○	
㉑	『奥秩父』	1935	○					○				○		○									○				○

類があり、とくに山論に関する近世文書中には、山名や山道、山中の祠について記したものがあり、参考となる。

以上、寺社記、金石文等の記載から雲峯寺、金桜神社の変遷は次のように整理される。

仁寿年間（851―853）　金桜神社を柚口地内、高天原に開創し、守護寺として米澤山雲峯寺（大禅寺、神ノ坊とも）を開く（智証大師勧請とも）。

康和２～５年（1099―1103）　寂円、如法経を米沢寺千手観音堂前で写経（奥社地遺跡の可能性大）。

中世？　一説には堂塔棟数58ヶ所、其他塔頭10ヶ院、修験５ヶ院、行者２軒、鎮守神殿、本地持仏堂、仁王門、末社等があり、繁栄。

天正年中（一説には天正10年＝1582　４月）　火災により諸堂の大半を焼失。一説には織田勢川尻肥後守秀隆により焼失するが、蔵王大権現、子守明神、勝手明神の神体は焼け残る。

寛永年間（1624―1628、一説には慶安年中）　大悲円満国師、五ヶ村宿老と図り小字吉野平（二本松）に再建。一説には慶安年中（1648―1652）、大悲円満国師を開山として智証大師像、蔵王権現の祠を移し、妙心寺末に属す。

寛文10年（1670）３月12日　火災により二本松焼失。

寛文13年（1673）12月　再建。

寛文年間（1661―1672）　一説には雲居国師当山に歴住の時、臨済宗妙心寺に属すとも。次の金嶺祖牟禅師往持し開山と称す。この頃三界万霊塔、鎮口など作られる。

正徳２年（1712）４月　雲峯寺住職寛翁和尚は五ヶ村宿老と図り、現在地（小倉原）に移転。

雲峯寺に関する記事が豊富なのに対し、金桜神社の記事は少ないことが注意される。二本松移転は大悲円満国師により行われ、神社に関する記事がほとんどないことから、この時点で金桜神社は高天原にあったのではないか。

3　牧丘町内の御岳道（柚口ルート）

柚口筋は御岳道の中でも最も東に位置する（図３）。秩父往還から旧牧丘町窪平東村を経て、玄坂をのぼり、千野之宮、権神社、大木神社を経て御神前石燈籠に至る（図１）。石燈籠には右「文化４年（1808）／金峰山是より五里」、左「宝暦十年（1761）　當村中米澤山」とある。この約80m北側に金属製の赤鳥居がある。旧赤鳥居は近年のバイパス工事で現在地に新造された。鳥居の手前には昭和３年、琴川電力会社建立の「金桜神社」という石碑がある。この赤鳥居をくぐり、水道企業団浄水場東側を通る道が椀大門で、金桜神社に至る。金桜神社南側には米沢山雲峯寺があり、北側に隣接して子守・勝手社、金桜神社が南北に並ぶ。

金桜神社の北650mには二本松の旧社地がある。林の中にやや小高い平地（基壇か）があり、中央に石祠が祀られ、南西側のコーナー付近には桝状の石囲いもある。かつて礎石も見られたらしいが、現在では確認できない。西側に小さな沢を挟んでテラス状の地形があり、金嶺祖牛と月林明證の供養塔がある。不明瞭ながら、東側と西側に堂社が区別されていたという推測もできる。二本松北には琴川を渡る鳥ノ口橋がある。「アゲマチ」と呼ばれ、岩が河床に露出し、禊を行った場と伝えられる（図版2-3）。この対岸上方に奥社地があるが、近世の御岳道は川を渡らないで琴川右岸沿いに北上するルートをとる。

一旦、赤鳥居に戻り、古いルートを説明する。赤鳥居手前で琴川方向に曲がる坂が神賀坂（神願坂）である（図版1-6）。現、青山橋下流、30～40mにかつて神賀楼があったと伝えられ、おかめ石がある。かつては帯仕石もあり、禊場とされたが、台風で流されてしまったという。琴川は帯締川とも呼ばれ、帯締石から帯仕石になったといわれている。川の対岸（右岸）を北上すると、途中に子ノ神がある。道の東側斜面、巨岩の間にあり、昭和12年奉納の石祠をまつる（図版1-8）。その先、道が狭くなって林の中へ入ると、青山千坊（軒）といわれるテラス群が道の西側に広がる（図版2-1）。石積を伴い、何らかの建物跡と考えられる。石積の状況は、奥社地南の林道下のテラス群に類似する。その北側には護摩壇があり、坂を上りきると林道手前に護摩堂跡がある（図版2-2）。さらに山中を進むと林道南側のテラス群を経て、林道を横切り、奥社地へ至る。

近世の御岳道は鳥ノ口橋を渡らないで琴川上流に進み、琴川第３発電所付近で左岸に渡り、金峰神社に至る（図２）。なお、この神社は近年の琴川ダム開発に伴って近くに移転した。その神社付近が御岳道西保筋との合流点である。鳥居峠を経て柳平集落に至り、剣が峰西側を巻いて金峰山頂を日指すことになるが、その途中に石祠があり、「文化八年（1812）／西保連建立」とある。またその先には「お助け小屋」という山小屋跡があり、登拝者の避難小屋として利用されたらしい。やがて荒川を渡り、御室小屋に出て、金峰山の南面から五丈岩を日指して登る。途中には鶏冠岩、弁慶の片手回し（勝手社）、天狗社がある。

4　柚口金桜神社と社宝

柚口金桜神社本殿中には御神体として木造蔵王権現像１躯が安置され、蔵王権現懸仏１面（山梨県指定文

化財)、松竹鶴亀鏡1面が神鏡として祀られている。2002年12月8日に鈴木麻里子氏と井澤英理子氏が、2004年6月18日には井澤氏と近藤暁子氏がいずれも県立博物館の調査として実見し、調書をまとめた。ここでは近藤氏報告を引用させていただくとともに、懸仏に関しては『山梨県史　文化財編』を参考に説明する。

(1) 木造蔵王権現像（写真4）

法量は像高68.3cm、髪際高62.7cm、頂-顎12.2cm、面長7.5cm、面幅7.5cm、耳張8.4cm、面奥10.3cm、胸奥11.3cm、腹奥12.7cm、肘張35.8cm。頭部は地髪をまばら彫りとし、髷を結わず、後方になびかせる。天冠台をいただき、額左右の髪を炎髪とする。二目で大きく開口し、上歯・舌をあらわし、憤怒の相をみせる。右手は振り上げて独鈷杵を握り、左手は左腰前で水槌を持つ。左足を軸に立ち、右足は踏み上げ、岩坐上に置く。左肩より条帛を付け、下半身に一段折り返した裙をまとう。金属製の腕釧、臂釧、胸飾、冠飾をつける。木造、寄木造り、玉眼嵌入、漆箔彩色で、頭部は挿首とし、左右手肘より先に別材を矧ぎ付ける。肉身天冠台は漆箔、頭髪は漆塗りの上に毛筋を金の線で描き、衣は小豆色の漆塗りとする。右手、左手肘より先、冠飾、胸飾、腕釧、臂釧、足釧、持物すべて、台座、厨子は後補で、制作年代は江戸時代。

(2) 蔵王権現懸仏（図7）

『金桜神社由緒取調書』では仁寿元年からの神体（神鏡）とされるが、懸仏と呼称するのが適当である。奥社に祀られていた、という伝えもある。銅製で、直径縦36.0cm、横35.7cm、厚さ0.8cm、重さ7.5kg。周縁に覆輪を表現し、3個ずつの鰐鋲を6箇所に鋳出し、中央に蔵王権現像を一鋳（共鋳）で陽鋳する。像は像高26.3cm、頂-顎6.0cm、面長3.8cm、面幅3.1cm、最大厚2.7cm（岩座部）。像容は正面向き、一面二眼二臂の忿怒相で、右手を振り上げて杵を握り、左手は腰脇にあて、刀印をあらわす通形の姿である。左肩から条帛を付け、腰で折り返した裙をまとう。腹前に獣皮をあらわす。内区界圏際には上部2箇所、下部1箇所に懸垂・固定のための穴を穿つ。像の周囲には境界線がみられ、鏡板とは別に先に鋳造し、鏡板鋳造の際に一体化された可能性もある。衣面の鋳上げはやや粗雑で粗い。類例が少なく制作年代は定かではないが、群馬県

図7　蔵王権現懸仏

写真４　柚口金桜神社の蔵王権現像

渋川村出土の大威徳明王懸仏（貞和４年、1348）と技法的に類似性があることから、南北朝前期頃の作かと考えられている。県指定文化財。

(3) 松竹鶴亀鏡

銅製。直径9.1×9.3cm、厚さ2.5mmで、周縁部覆輪内に松竹、鶴２羽、亀１匹、左下方に美濃守を陽鋳する。下部周縁は2.6cmの幅が欠失し、２箇所に孔が穿たれている。柄鏡の柄部を除去して神鏡としたもので、時代は江戸期。

5　牧丘町内の修験系寺院と神社

旧牧丘町内には、以下のように多数の修験系寺院があることが『調査報告Ⅰ』で指摘されている。

牧丘町隼地区―教正院、林光院、東昇院
牧丘町倉科地区―上求寺、内膳院、遍照院
牧丘町西保下地区―万光院、慶学院
牧丘町西保中地区―大徳院
牧丘町北原―国寶院、正国院
牧丘町千野々宮―慶徳院
牧丘町柚口―竜法院

このうち大徳院、国寶院は山号「金峰山」で、ともに小楢山南側の妙見山麓にある。御嶽道西保ルートは西保地区を通って塩平に抜け、焼山林道を経て柳平方面に出る１本の道筋が一般的であるが、それとは別に金峰山へ向かう道筋として小楢山を通る尾根道が盛んに利用されたといわれる。主な道は倉科の上求寺付近から牧丘芸術の丘（オーチャードヴィレッジ・フフ）の辺りを通り、山頂へ向かう道で、途中には白雲の滝や薬石門、羅漢門と名づけられた岩がある。また南側から妙見山を経て小楢山へ抜けるルートも利用されたらしく、その登り口にあたる山麓に金峰山の山号をもつ寺院が点在する。北原の洞雲寺は、修験系ではないが山号「金峯山」で、すぐそばの漆川集落入口には北原金峯山神社の石鳥居、石祠があり、拝所となっている。

牧丘町西保中古宿にある金峰山大徳院は現在廃寺であるが、牧丘町教育委員会の調査により個人宅で役行者像、不動明王像厨子を保管していることが明らかになった。もと天台宗で、役行者堂があったといわれ、観音菩薩像や「北辰妙見尊家運安全如意祈攸／金剛坊大徳院」という札などを所有する。妙見山は小楢山南の尾根続きの峯で、山頂の南下に大きな岩が巻き、いくつかの石積を伴うテラスがあり、岩陰に妙見山の祠が祀られている。祠中には神像とともに札２枚があり、金剛坊大徳院による文政２年の遷宮時の札、文化13年の札など納められているのを確認している。

妙見山信仰は天台宗圏城寺の新羅明神と関りの深い信仰で、山梨県内にはほかに万力金桜神社西方、兜山東側の山腹に妙見堂が祀られている。甲斐の金峰山信仰では智証上人円珍に始まる天台寺門派が非常に重要な役割を果たしたと考えられ、山岳修験とともに妙見信仰も伝播したのであろう。県内では、金峰（峯）山という山号をもつ寺院は少ない中で、西保筋に金峰（峯）山を山号とする寺院が集中する状況は注目され、西保地域と金峰山との関りの強さを示すとともに、妙見信仰と結びついた金峰山信仰の地域的な実態を物語っている。

神社としては、天台宗ゆかりの日吉山王神社が牧丘町室伏の琴川に近い左岸にある。旧三富村（現山梨市三富町）との境をなす山々の先端にあたり、そこから尾根道を辿ると大久保山、東御殿、西御殿、大鳥山に至る。さらにその先には奥千丈、国師ヶ岳、朝日岳、鉄山、金峰山と、尾根筋ばかりを選びながら金峰山山頂に到達することができる。これらの峰の中で大鳥山は室伏日吉山王神社の山宮とされ、大鳥山南面には雛岩（ヒゲナ岩、サンゴウ岩）とよばれる断崖があり、岩窟が存在するという。一説には寛文年中、雲峯寺に入った雲居禅師は雛岩で面壁修行したと伝えられ、雲居禅師参禅の岩屋跡があるといわれる。日吉山王神社から大鳥山へ尾根道を辿るルートがひとつの修験コースとなっていた可能性があり、この道筋は山本義孝氏が想定した中世段階の柚口ルートに重なるものである。大鳥山、小鳥山は見る場所によってはあまり目立たない山ではあるが、大鳥山は断崖があって特徴的で、小鳥山は神奈備型を呈している。奥社地の選地につい

ては、東御殿を信仰の対象として成立した可能性があり、その先の小鳥山、大鳥山、さらに金峰山へ連なる山々を見据えた上での選地と考えられる。中世以前には峰入りの道として利用された可能性の強い尾根道に近いことから、金峰山の修験道場として栄えたとする説も生まれたと考えられるが、実際には金峰山との関連性は不明である。室伏の日吉山王神社と奥社地についても、同じ尾根筋にある天台系の寺社として関連付けて考えることができる。

蔵王権現の祭礼は『金桜神社由緒取調書』に「陰暦三月十一日ハ氏子中神輿行幸御休所ニテ祈祷ノ上守札ヲ授与ス」とあり、「金桜神社之景」に「年内祭祀之内三月十一日者大祭也、子酉川辺隼之地ニ宮奉行神輿行幸大麻官廟ニ納、明治維新来五ヶ村杣口、千野々宮、城古寺、窪平、請地、隼之者斎戒神輿行幸供奉」とあるように、旧暦3月11日が大祭である。今日では杣口の打ちはやしとして5年に1度、4月11日に行われている。同様な祭りが室伏の日吉山王神社にあり、これは毎年4月11日前後に行われる室伏の打ちはやしである。『甲斐国志』「山王明神」によれば「毎年四月第二ノ申ノ日成沢ノ唐土明神・下萩原ノ山王権現三社・栗原筋上神内川村山王権現ヘ神幸アリテ彼ノ地ニ鎮座シ十一月第二ノ申ノ日当社ヘ還御ス（中略）今ハ四月申ノ日三御輿笛吹河原ヘ渡御スト云ヘリ」とあって、杣口の大祭に合致した内容が記されている。このように蔵王権現の祭礼日が日吉山王神社の祭礼と一致し、内容的にも類似した祭礼として伝えられていることから、金桜神社に天台宗、日吉山王神社の影響が色濃いことが祭礼のあり方からも歴然としている。

「室伏」の地名の初出としては、「夫木和歌抄」に「題知らず、梁塵秘抄」として所収される「甲斐にをかしき山の名は、白根波埼塩の山、室伏柏尾山、篠の茂れるねはま山」という歌が知られている。まず室伏を山と認識している点が注目され、室伏と柏尾山（勝沼町大善寺）がセットで詠まれていることから、両者は当時の勝地として甲斐を代表する存在であったことがうかがえる。一方の柏尾山が当時天台の一拠点と考えられることから、室伏もまたそれに関連した地であったことは想像でき、室伏に通じる中牧山が同様な場であったことを示唆するものであれば、興味深い。とくに中牧山村にあったと考えられる米沢寺で実施された写経が柏尾山白山平に埋納されたとすれば、両者を結ぶ強力な要因があり、背後に寺院の維持経営を支えた基盤があって、両者の仲立ちをしていたとみることができる。具体的には経筒文末にある三枝宿禰守定・守継・守清をはじめとする三枝一族の庇護が考えられ、米沢寺の消長も三枝氏の動向と連動するものであった可能性がある。また両寺を結ぶ道筋がのちの道者街道に発展した可能性もあり、金峰山登拝口としての杣口ルートは、そうした歴史的経緯の中で派生した可能性も考えられよう。

写真5　米沢山雲峯寺

写真6　杣口金桜神社

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

1　2004年度調査

遺跡全体図の作成をひとつの目的とし、林道から北側、奥社までの範囲を図化エリアとして国家座標に基づき地形測量を行った。また周辺を踏査し、テラス群の分布状況を把握し、図示した。等高線は１mコンタで表現した。

礎石の存在が明らかな地点では、ピンポールにより礎石を探り、礎石部分に関して表土を除去し、その配置を図化した。５号テラスの石積（３号石積）については、石積の下面まで清掃発掘して露出した。石段についても清掃発掘を行い、平面図、立面図の作成を行った。

２号建物跡から奥社にいたる石段については、ほとんどが埋もれていたため、清掃発掘を行い石段を露出し、平面図を作成した。

そのほか遺物の分布状況を探るため、９号テラス中央の広場、９号テラス西側、12・13号テラスに調査区を設定し、掘り下げた。そのうち２箇所に関してはサブトレンチを入れ、土層堆積状況を確認した。

2　2005年度調査

厳冬期の調査となったため、当初は遺構確認面での精査までを予定していたが、凍結などの条件下で断念し、中心部分と考えられる９号テラス内のコ状の石積、中央の仏壇跡、両脇に想定される堂跡の礎石建物群の遺構・建物配置・規模を明確にすることを優先的な目的とした。礎石面については、最下層まで掘り下げず、礎石下面よりもやや上で掘削を止めた。廃土は土嚢に詰め、地点ごとに積み上げて、埋め戻し時点で元の地点に戻せるように心がけた。そのほか、２・５号テラスについても調査予定地とし、清掃発掘などを行った。

基準点に関しては、2004年度調査の杭から測り出して遺跡全体図上に５mグリッドをかけ、調査予定地で打設可能な場所にグリッド杭を設置した。また必要があれば任意の地点に杭を設置し、実測に利用した。2004年度作成の全体図についてはスキャナーでパソコンに取り込み、（株）アイシン製のソフト「遺構くん」でトレースして基本図面とした。また現場図面については、パソコン中の基本図面に同一縮尺で貼り付け、順次追加していった。

遺構平面図は光波測量機を用い、座標杭からのX・Yの数値測点を図面上に落とし、点をつなぐことで1/20を基本に作図した。なお現地は杉・桧が非常に密に植林されているため、見通しが極めて悪く死角が生じてしまうため、光波２台で作業したほか、任意点を随時設置して対処した。なお、原点（Aa-1）は南西隅の図上点で、国家座標X＝－23570、Y＝17480であり、北方向にアルファベッドでAa～z、Ba～zとし、東に１～40として両者の組み合わせでグリッド番号とした。

遺物は通し番号で全点を取り上げ、光波測量による座標値（X・Y・H）を遺物台帳に記載した。

写真は35ミリ白黒、リバーサルフィルム（ともにASA400）によって撮影したほか、デジカメを用いた。また業者委託により、ポール先端にカメラをつけた簡易的な撮影方法で、６×７判カラーネガ、リバーサルフィルムによる空中撮影を実施し、図面のチェックをした。なお、調査地点は林立した木立の中のため、全体写真の撮影が困難であり、さらに日がさすとコントラストが強く、思うような写真を撮影することは困難であった。

第２節　層　序

各遺構の覆土については、それぞれ説明中に記したとおりで、基本的には１層―黒褐色土（表土）、２層―暗褐色土（遺構覆土）、３層―明黄褐色土（地山）となる。テラス面は北側を削土し、南側を埋めていることから、中央から北側では表土下が地山であることが多いが、南側では何層かの間層をはさみ、地山がわかりにくい。

第３節　遺　構

奥社地遺跡へは現在、林道脇の鳥居から入り、一部砂利敷きで整備された参道をたどると、石段、石垣の残る５号テラスに至る。そこから１本の長い石段が奥社まで続いている。そのほか鳥居から奥社地へ上る道は複数存在し、遺跡内にいくつかのルートを認めることができる。また西側尾根を越えた西沢沿いには幅の広い山道があり、それから奥社地方面に進入する獣道に近い山道は数本存在する。

鳥居から奥社までの山中は緩斜面が続くが、奥社裏からは急に傾斜がきつくなり、背後の峯につながる尾根となっている。遺構が点在するのは標高1031m付近の11号テラスから標高1068m付近の奥社（１号テラス）までの間で、その一帯は大型の岩が点々と甘立つ風景となっている。奥社裏の急斜面は岩場となり（図版2-5）、

さらに上の尾根道は大きな岩が幾重にも重なったり、自然の岩除が見られる風景に変化し（図版2-6・8）、修験の峯入りにふさわしい様相を呈している。また東御殿や前後の尾根道では、岩が少なく低い笹が茂り視界が開けた違った光景となっている。

奥社地遺構はテラス（平坦面）、石積、石段、石組、通路遺構で構成され、礎石建物跡がテラスに配置されている。これまでに確認されたのは、テラス20面以上、石積12箇所、石段６箇所、礎石建物跡５棟以上、石組１箇所、通路遺構２本で、遺構別に数字で遺構番号を付けた（なお、『山梨県考古学協会誌』15号の櫛原・大崎報告を元にし、新たに認識したテラスについては追加した）。

最上段にあるのが１号テラスで、奥社は昭和44年に明治維新百年を記念して再建された、ブロック積みの社殿中に石祠を祀るものである。その北側斜面は傾斜角がきつい急斜面となり、さらに数十m北の斜面は、岩が東西に帯状に広がる岩場となる。この岩場を磐座として奥社が設置されたのではないかという推測もできるが、特徴的に目立つ岩はなく、おそらく違う。背後の尾根を意識した立地と考えられる。

遺構群は南北方向に展開し、大きく東側と西側の２群に分けて考えられる。東側は、沢筋に近い３号テラスから奥社のある１号テラスまでの間に直線的に石段が整備され、途中に２号テラスがある。このうち5号テラスは従来、門ではないかとされてきた遺構である。西側は９号テラスを中心に、12・13号テラスが付属し、南側には10・11号テラスが存在する。通路遺構は12・13号テラス横、尾根際と、９号テラス中央の３号石段から10号テラス横を通過して直線的に伸びたかすかな切面が存在し、南端にあたる場所に10号石積を伴う。そのほか６号テラスには小祠の基壇跡かと思われる１号石組がある。

東沢には一部伏流水となっているが、年間通して水流があり、寺社の祭礼に欠かせない清浄な水を得ることができる。沢の岸にも石積らしい箇所を見出すことができるが、明確ではない。なお奥社から西へ尾根を越えて下ると、すぐに西沢の豊富な水流がある。沢沿いと１号テラス西側には、山から押し出したような帯状の巨礫集中部があり、かつて山が大きく荒れた時期があったことを物語る。巨礫集中部を避けるようにして各テラスが配置され、テラスが礫群の押し出しで侵食された部分はとくに見られないことから、テラス造成以前の古い氾濫であったと思われる。東沢は今日ではさほど遺跡を侵食するような影響を与えるものではないが、梅雨時などでは西側尾根沿いに回り込んだ水が12・13号テラス付近に流れをつくり、遺構面をえぐった箇所がみられるほか、奥社地へ至る道は降雨時に川となって、遺構面を浸食しつつある。

以下、テラス、建物跡、石段、石積、石組の順に説明する。

１　テラス

１号テラス（図版3-3）

現在、奥社社殿があるテラス。2004年度調査のA地点。標高1067～1069m。東西30m、南北24mを測る。背後の北側斜面を丸く大きく掘削し、南側に盛土して東西に長いテラスが造成されている。南中央には２号テラスにドる１号石段が存在する。社殿前面には従来よりいくつかの礎石が知られていたため、2004年度にはその部分に８m四方の調査区を設定し、礎石配置確認のための調査が実施された。その結果、礎石が５個確認され、３間以上の拝殿かと思われる１号建物跡が現在の社殿前に存在したことがわかった。

テラスの構築状況から時期を示すことは難しいが、斜面を丸く削土している点は、中世までの山城などに見られるテラスのあり方とは異なる雰囲気をみせ、１号石段に近世以降の矢穴が多数みられること、出土遺物の内容を加味すると、全体に近世的である。

２号テラス（図版3-4・5・7）

１号テラス下のテラスで、2004年度調査のE地点。標高1058～1061m。全体では１枚のテラスの広がりとして捉えられるが、細かく見ると2004年度調査の石段（７号石段）を境にして上下２面のテラス（2-1、2-2）に区別される。

2-1・2分テラスは全体では東西43m、南北27mを測る。上段の2-1分テラスは東西38m×南北16mで、北側中央から北に１分テラスへ続く石段（１号石段）がある。石段手前、右手には人為的な立石があり、表面には全体に弱いヒビ状の線が入り、以前より「矢来文字」とされてきたが、文字ではない。表面の縁には、石を割る際の矢穴が並び、１分石段のひとつの石を割った際の片割れとみられ、石段構築時に立てたものであろう。

2-2分テラスは東西43m、南北10mで、南縁には１号石積がある。中央には５号テラスに下る２号石段が取り付いている。

2-1号テラス南縁から2-2号テラスにかけて多数の石が露出しており、70cm程度の段差となっている。その性格を見極めるため、2004年度には2-2分テラスを中心にテラス境にかけて8×６mの２箇所の調査区を東西に設定し試掘が行われた（当側がE1地点、東側がE2地点）。

図 8　遺跡全体図

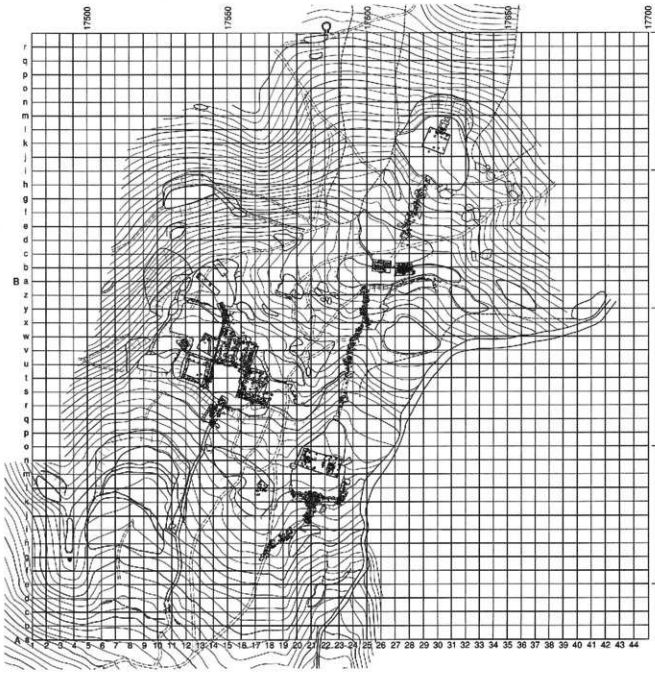


図9　グリッド配置図（1グリッドは5m四方）

E1地点は覆土が黒褐色土で、厚さ5～10cmである。表土直下は暗褐色土であるが、地山ではない。調査の結果、横幅4m、3段程度の石段（7号石段）が検出された。その北側には、径90～110cmほどの大型礫を用いた礎石が2個、東西に直線的に並び、何らかの建物の礎石列と考えられた。石段はE2地点西側が突出するように構築されており、東側では奥にへこんで、やはり石段状の石積が2～3段分見える。またE1地点との間には南北に列状の石が並び、E1と2を仕切っている。さらに石段手前には礎石状の平石があり、別の建物があった可能性もある。出土遺物としては、土師質土器など12点が出土した。

E2地点は覆土厚6～17cmで、覆土は黒褐色土である。また礫下層も黒褐色土で、地山ではない。調査区内からは西側と区画する列石を境に小振りの礫多数を集めた礫面となる。上段部分がE2から直線的に続いているようにみえ、上段に想定される建物跡は一続きのものと推測される。遺物は非常に多く、土師質土器など52点が出土している。

2-1号テラスの建物については、一部の調査のため全体像がわからないが、テラスが7号石段を中心にして東西の横長であることから、東西に長い建物が存在した可能性がある。建物正面に石段が付随する建物として、社殿の可能性も考えられ、今後、礎石配置を明

らかにして建物の性格を見極める必要がある。

3号テラス

2号テラス西側に位置する小規模なテラスで、2号テラスの緩やかな傾斜の先端に位置し、2号テラスの一部として捉えることもできる。南縁にL字状の2号石積がある。東側の石積が道によって一部分断され、延長線上に石積が残ることから、本来のテラスの広がりを示している。テラスの推定規模は東西9m、南北8m。標高1055m。未調査。

4号テラス

2-2号テラス東側に連続し、東沢に近い。東西16m、南北6m、標高1059m。この付近から南では、沢は伏流水となって水流が地上では見えていないようである。未調査。西側には2-2号石積があり、L字に折れた石積が構築されている。

5号テラス（図版4-1・5）

石積・石段を伴うテラスで、従来よく知られてきた場所である。2004年度調査のD地点。標高1040～1042m。南面と東面には3号石積があり、南面の中央西寄りの位置に3号石段がある。テラス面は東西18m、南北28mで奥行きが長く、北側には2号テラスへのびた2号石段が取り付く。

2004年度にはテラス中央にD1・D2地点を設定し調査したところ、割拝殿とみられる2号建物跡が検出された。正面石段からは奥まった位置に東西に長く配され、石段の中心軸に合致するように割拝殿の馬道中心を設定している。テラス面は石積上端と比べると高く盛り上がり、建物礎石面は石段上端から約1.2m上に位置する。2号建物跡では、集石中から寛永通宝が出土し、包含層中から18世紀後半を主とする遺物が出土したことから江戸時代の建物と考えられるが、3号石積と5号石段はそれ以前の構築と思われ、時間差が存在すると考えられる。本来、このテラスがどのような性格の場であったのか、テラスの断ち割り調査が必要とされる。また、本テラスから北へのびる2号石段は時期不明ではあるが、3号石積、5号石段にともなうと考えられる建物跡が中世に遡る可能性が高いことを考えると、2号石段は同時期に整備されたと考えられ、5号テラス内に2号テラスの建物に対する門としての建物が存在した可能性も考えられる。

6号テラス

5号テラス西側に位置し、テラス東寄りに1号石組が存在する。5号テラスより一段高く、2号建物跡を見下ろすような位置にある。標高1040m。2004年度調査区のF地点。山道にえぐられるなどテラスとしては不明確ながら、東西28m、南北15mと推定される。テラス面は平坦ではなく、緩やかな傾斜をもつ。

2004年度には、石組南側に4m四方のトレンチを設定し、調査を行った。覆土は1層―黒褐色土、2層―暗褐色土で、厚さは3～15cmである。礎石状の平石が数個出土したが、建物の礎石かどうかは不明。遺物は出土していない。

7号テラス

9号テラス北東、8号テラス上で、現状では山道が撹乱しているため平坦ではない。東西14m、南北13m、標高1050m。奥社への山道脇に昭和32年1月建立の金桜神社旧社地としての部分林であることを記した石碑が立つ。未調査。

8号テラス

9-1号テラス北側に隣接し、境には7号石積が設けられ、低い段差を形成する。東西18m、南北8mと小形。標高1048m。地表面には礎石状の平石が1～2点認められ、礎石建物跡が存在する可能性が強い。未調査。

9号テラス（図版5・6）

以前より大型礎石群、コ状石列が確認されていた地点。東西62m、南北26mと本遺跡内では最大級のテラスである。3号建物跡を中心に左右対称に設置された3～5号建物跡が存在する。中央には東西12m、南北11mの南向きのコ状の5号石積があり、内側は方形広場となっている。5号石積を境に一段高い建物群の面を9-1号テラス、広場を中心とした一段低い面を9-2号テラスと、2つに区分する。

9-1号テラスは東西62m、南北26mで、東は5号テラス脇、西は西側の尾根際まで広がり、東西方向に可能な限り長く占地している。テラス西側には13号テラスとの境に6号石積があり、テラス基底の土留めとなっている。標高1048m。

9-2号テラスは方形の広場を中心とする東西23m、南北14mのテラスで、標高1047m。広場から4号建物跡前に細長い空間が続く。またテラス中央には4号石段が付属し、その東側には4号石積が露出している。西側には、現状では明確な石積はないが、点々と石積のの礫が露出し、本来は法面全面に石積が形成されていたものと思われる。北東には低い7号石積があって、その上面が8号テラスとなる。西側には6号石積があり、13号テラスが隣接し、9号テラスを中心にその左右にテラス群が集中する。

調査は2004年度に3・4号建物跡付近で礎石確認作業が実施されたのち、4号建物付近（C1地点）、9-2号テラスの方形広場内（C2地点）、3号建物西側（C3地点）の3地点にトレンチを設定し、試掘調査が実施さ

図10　9号テラス（1/300）

れた。その結果、礎石をもつ3・4号建物跡が確認され、C3地点では3号建跡物西側の雨落ちラインと思われる石列が検出された。

2005年度には3・4号建物跡に土層観察ベルトを残して全面掘り下げ、礎石配置を確認した。3号建物跡では2004年度確認の雨落ちラインを北に追い、6号石列を発見した。またテラス西側についても4号建物跡に対になるような建物が想定され、ピンポールによる探査で礎石列の存在が推定されたため、トレンチ4本を設定して礎石配置を確認した（5号建物跡）。またテラスの構築状況をみるために4号石段脇にトレンチを設定し、深掘りを試みた。

現状では建物群が左右対称の構成を示すが、4号建物跡南側には広場から続く細長い空間があるのに対し、5号建物跡の南側にはない。5号建物跡南側の礎石列が緑ぎりぎりのところから検出されていることから、本来は5号建物跡南面に5号石積の続きがあって、若干の細長い空間があったはずであるが、テラス南縁の崩落でなくなった可能性が高いほか、当初から盛り土造成の面積が不足し、空間的な余裕がなかったかと思われる。

礎石列、石積、石段中心軸の配置を総合的にみると、それらは一体として設計・施工されている（図22）。礎石の規模も大型品で統一されていることから、それらの構築物は時間差をもって順次構築されたのではなく、比較的同時期に計画的に作られたものといえるだろう。その構築時期（創建年代）については、3号建物跡は出土遺物から12～13世紀に遡ることが明らかで、出土遺物の年代を盛行期、あるいは廃絶期とみなすと、それ以前に遡る可能性がある。ただし、今後テラスの断ち割りによってより古い段階の遺構面が発見される可能性もある。

本テラスには3間×3間の3号建物跡を中心に、東の4号建物跡が2間×4間、西の5号建物跡が3間×4間の礎石建物で、3つの建物が方形広場を囲むようにコの字状に近接して配置する。とくに3号建物跡については奥社地遺跡の中でも中心的な建物と考えられ、その構造は須弥壇を備えた仏堂である。東西に配置された建物については、当初経蔵、鐘楼を想像したが、礎石配置からその性格を明らかにすることは難しい。両者とも礎石が3号建物跡同様に大きいことから、単なる雑舎、僧房的な建物ではなく、仏堂的な性格ではなかったかと思われる。想像を逞しくするならば、写経所とも考えられる。甲府市御岳金桜神社の旧建物群の東宮本殿をはじめとする仏堂的建物が密に建てられた状況を想起しておく。

方形広場については、2004年度にC2地点として調査された。それによると土層は1層―黒褐色土、2層―灰黄褐色土で地山類似。厚さは3cm。遺物は土師質土器2点が出土し、遺構はない。硬化面はとくに確認されていない。

3号建物跡西側ではC3地点として調査され、サブトレンチを設定して深さ40cmまでの土層が観察された。その結果、1層―黒褐色土、2層―暗褐色土、3層―褐色土、4層―暗褐色土（明黄褐色土ブロックを混入）、5層―暗褐色土で、地山はなく、南西部を大規模に造成して谷を平坦化し、9号テラスを作り出していることが想定されている。

10号テラス

9号テラス下。11号テラスと隣接し、11号テラスとは石列状の9号石積で区別されているが、大きく捉えれば両者は一体のものである。標高1033～1037m。東西24m、南北22m。大規模に北側斜面を掘削し、テラス面を造成しているが、テラス面は平坦ではなく、緩やかな傾斜面となり、詳細にみると、上下2段に分けられる（10-1・10-2号テラス）。その場合、10-1号テラス（上段）は東西22m、南北8m、標高1035m、10-2号テラス（下段）は東西24m、南北13m、標高1034mである。両者の区別は西側の尾根に対する切り土部分で識別可能であるが、テラス境の段差としては不明瞭である。未調査ではあるが、建物群があった場所というよりは寺院関連の畑地、お花畑といった場所ではなかったろうか。

11号テラス

10号テラス南。全体的に見れば10号テラスと一体の緩斜面であるが、境に9号石積があり、西側の切り上の状況から10号テラスとは区別される。標高1031m。東西27m、南北18mで、やや不明瞭な平坦面である。

12号テラス

13号テラス上、9号テラス北西で、西側の尾根に接する。標高1049m。東西17m、南北18mで、南縁には8号石積がある。本テラスと9-1号テラス西側、13号テラス付近は降雨時には雨水を集め、一部溝状の流路と化している。2004年度には西沢と仮称したが、沢ではない。また、西の尾根西側に「西沢」は存在する。流路化して上が露出した付近から柱状高台を含む土師質土器が多数表採されていたため、土器の出土状況を確認することを目的に、2004年度には流路と直交するようにトレンチ2本を設定し、下部の状況を探った（仮称西沢1・2地点）。

両地点の土層は同一で、1層―黒褐色土（表土、厚さ3cm）、2層　暗褐色土（厚さ約20cm）、3層―にぶ

い黄褐色土（地山）である。

遺物は11点と少なく、礫がいくつか出土しているが、礎石と判断できるものはなく、明確な遺構はない。

2005年度調査では、３号建物跡北西から本テラス東側へ取り付く６号石段が検出された。したがって本テラスと９号テラス、とりわけ３号建物とは関連が強く、時期的にも同時期と考えられることから、６号石段とともに本テラスも12～13世紀以前に遡るものと考えられる。

13号テラス

９号テラス南西。標高1044m。東西12m、南北10m。東側は９号テラスで、その境には６号石積が構築されている。９号テラスとの段差は約２mである。

2004年度には９号テラス西側法面に近い部分にトレンチを設定し、礫面まで調査した（西沢３地点と仮称）。当初、溝状あるいは井戸状の石組とも見られたことから調査されたが、地山の巨礫を中心に小振りの礫が多数検出され、井戸等の構築物ではないことがわかった。覆土厚は14～18cm、土層は上から1層―黒褐色土、2層―暗褐色土であり、部分的に褐色土が堆積する。いずれも地山上層である。遺物は土師質土器2点が出土している。

14号テラス

西側の尾根の途中、急斜面に構築されたテラスで、東西19m、南北６m。標高は1063mで、南東方向に向いている。９号テラスと周辺を見下ろす位置にあり、すぐ下には16号テラスが存在し、また東側には3号通路が接続し、その一部と思われる15号テラスがある。小規模なものではなく、一定の面積を大がかりな造成によって確保していることから、９号テラス等と関連性があるとみておく。現状では西側尾根からのかすかな山道がテラス西側に取り付いていることから、西側から遺跡に至る進入路のひとつとも考えられるが、定かではない。未調査。

15号テラス

14号テラスの下側にあり、本テラスから14号テラスへ３号通路が設置されている。また本テラスから東側へ下るわずかな山道があり、12号テラス北方、３号テラス西側に下っている。東西５m、南北３mと非常に小規模なもので、通路の一部とも考えられる。標高1059m。未調査。

16号テラス

標高1058m。14号テラスの下側。東西６m、南北４mで、15号テラス同様に非常に小規模。未調査。

17号テラス

遺跡西側尾根の先端、南西斜面にあり、林道を見下ろすテラス。標高1035m。東西11m、南北４mで小規模である。テラス縁には石積状の礫が見られるが、現状では石積とはいいがたい。立地が他と異なり、奥社地遺跡の遺構群との関連の有無は定かではない。未調査。

18号テラス

１号テラス南側、１号石段西側の空間で、脇には巨礫群が迫る。明確なテラスとはいいがたく、わずかに傾斜する。東西12m、南北４m。標高1064m。未調査。

19号テラス

５号テラス南側。４号石段前のテラスで、石段を降りた周辺が平坦になっている。東西15m、南北５mで、テラスは沢方向を向く。未調査。

20号テラス

９号テラスと12号テラスの西側に位置し、尾根の斜面を削上して小さなテラスが２箇所、連結するようにして作られている（南側が20-1号テラス、北側が20-2号テラス）。20-1号テラスには、南側から尾根際に南北方向の１号通路が取り付く。20-2号テラスの北側は通路の有無が不明確で、現状では尾根際をそのまま北上する道があることから、それに接続すると思われる。本テラスの性格は不明で、1号通路の一部という見方もできる。

21号テラス

標高1053m。東西19m、南北14m。２号石段東側に存在する。

22号テラス

標高1062m。東西17m、南北６m。４号テラスと23号テラスをつなぐ位置にある。

23号テラス（図版2-8）

標高1066m付近か。東西14m、南北５m程度。東沢に面したテラス。浄水を得るための水場か。

その他のテラス状遺構

そのほか、小さなテラス状遺構が点在する。１号テラス南側、19号テラス南東斜面、３号テラス西側、20号テラス西側などにあり、大掛かりに造成されたものではなく、かろうじてテラスとして認識できる。また17号テラス南の尾根先端は、尾根上が平坦になるように削土された形跡があり、盛り上で平坦面を拡張した痕跡はないが、テラスと認識してよい場所である。

2　建物跡

１号建物跡

１号テラス内。2004年度調査。

調査地点は社殿前、テラスのほぼ中央で、地山が一部露出しており、ごく浅いところから礎石６個が確認された。また社殿前には東西に配置された石列があり、

その中には方形に加工されたほぞ穴をもつ礎石1個が存在する。近世以降の礎石で、現社殿再建前の旧社殿に伴うものと考えられる。

腐土は黒褐色上で厚さ0～18cm、地山は明黄褐色土で、調査地点はテラスの中でも切り土面側であり、礎石周辺はすぐに地山となっている。

確認された礎石は、約40～70cmの平石を用い、一部動いているらしく、一部整然とした配置ではないが、間口は東西5m以上、3間程度の建物であろうか。礎石間は1.7～2mである。

遺物は鎹、角釘、瓦石などが10点が出土し、土器、陶磁器がない。神社空間のため清浄に保たれていた可能性が指摘されている。

1号建物跡の礎石は、18世紀代と推定される2号建物跡と同じく小振りの平石を用い、3号建物跡の礎石の大きさと比較すると貧弱である。したがって1号建物跡も2号建物跡と同じ頃の所産で、現社殿前にあることから、拝殿かと考えられる。

2号建物跡（図版4）

5号テラス内。2004・2005年度調査実施。

2004年度調査では、東側にD1地点を設定し調査したところ、3間四方の礎石建物跡が検出され、さらに2間分の間隔を開けて西側に建物があることがわかったため、西側にD2地点を設定し調査した。その結果、中央通路をはさんで東側に3間×3間、西側に2間×3間の一続きの建物礎石であることが判明した。

D1・2地点の土層は、1層―黒褐色土（表土、厚さ3～15cm）、2層　暗褐色土（地山ではない、一部締りのある面あり）。東側中央には礎石間に2m四方の集石があり、半裁したところ、深さ20cmで底面中央に炭化物、焼土粒が分布し、寛永通宝1点が出土した。建物中央は通路空間で、土が硬化していた。

2005年度はまず、3間＋3間の可能性を考え、西側にもう1間分の礎石列があるかどうか探ったところ、これまで検出されていた西端の位置で礎石間をつなぐように列石が検出され、さらに西側には礎石がないことが確かめられたことから、2間＋3間の割拝殿であることが再確認された。また、西側2×3間の中央付近に配石があり、東側と同様に何らかの落ち込みとなっているらしい（下層については未調査）。

これまでの調査を総合すると、2号建物跡は西側2間＋東側3間、奥行き3間の割拝殿で、N-15°-W。東西12.8m、南北5.4mの建物で、通路部分は幅3.6m、柱間は1.8m。5号石段が石積全体からみると中央やや西に寄っており、それに合わせるように建物中心の通路部分（馬道）が西に寄っている。礎石は径40～70cm程度の小型の平石で、計22個所確認され、西側では礎石間をつなぐように疎を直線的に配する部分がある。東側部分では北列礎石の外側に別に2個の礎石があることから、北側からの出入口に関わる礎石と考えられる。

出土遺物は2004年度31点、2005年度9点の計40点で、煙管、和鋏、灯明皿、灯明具など陶磁器片等が主に西側から出土した。それらは18世紀後半を中心とする江戸期の遺物であることから、建物の廃絶年代は18世紀後半頃以降の可能性がある。建物の位置がテラス中央、やや奥寄りで、3号石積の位置からは奥まっていること、礎石面と石段上面とのレベル差が約1mと大きいこと、石垣の東西軸と建物の軸線がわずかにずれていることから、2号建物跡は本テラスに当初から伴うものではなく、江戸期の再建であり、再建時期は集石下の寛永通宝が建立に先立って埋納されたものとすると、寛永通宝の時期が建立時期の上限を示す可能性があり、江戸時代と考えられる。

寺本統一氏のご教示によれば、2間＋3間の割拝殿の例には京都市鞍馬の由岐神社例などがある。また中央の石敷き、集石については、泉佐野市の大木遺跡でも三間堂中央にあり、その性格については検討中であること、足利市の法界寺にも類例があることをご教示いただいた。随神門や仁王門のように、像を安置するような壇のような性格であれば、像の下の土間に石を敷くなどして湿気対策としたか、集石によって十台固めをしたのではないかと思われる。あるいは、護摩壇的な施設、または囲炉裏的な施設を礫によって埋めた可能性も残される。半裁によって炭化物とともに出土した銭は、地鎮具的な埋納物かもしれない。

3号建物跡（図版5）

2004年度調査によって、5間×3間分の礎石をもつ建物跡と判明し、須弥壇と思われる礎石4個も確認された。C3地点では3号建物跡の軒端の雨落ちラインと考えられる列石が南北に検出されたほか、3号建物跡とは別の礎石建物の可能性がある平石も検出されている。

2005年度の調査は、まず3号建物跡の中心に南北方向のトレンチを入れ、礎石下面まで掘り下げて上層を確認した。その後、ベルト3本を南北に残し、全体を掘り下げた。また西北隅の雨落ちラインを北側へ追ったところ、途中から2列の列石となり、12号テラスへ上る石段が検出された。

これまでの調査を総合すると、3号建物跡は9号テラス中央北側に位置し、正面を南面とする3間堂の礎石建物である。東西、南北ともに6.5mで、建物の主軸ラインはN-16°-Eである。身舎は3間×3間で、東

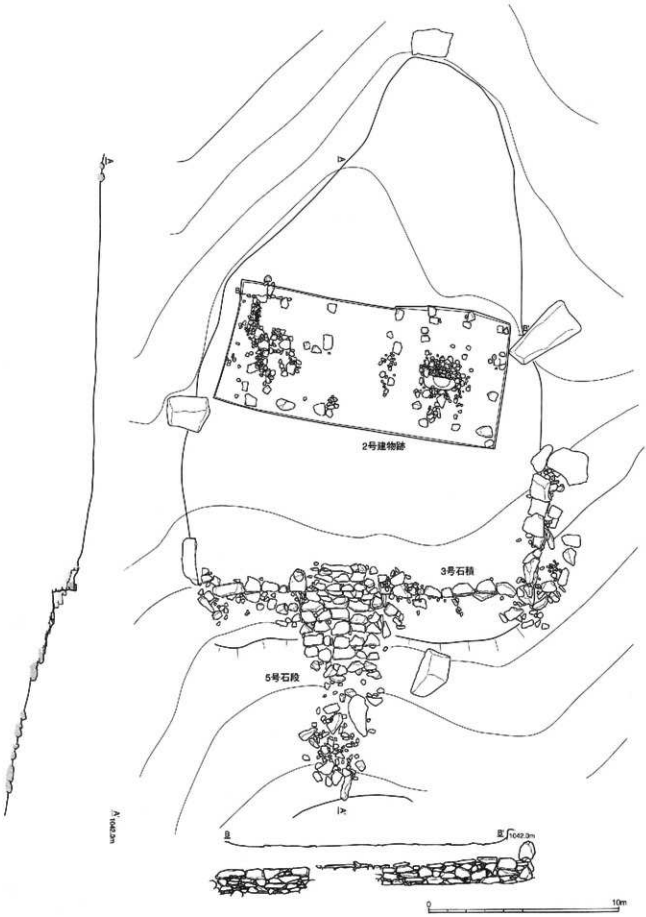


図11　5号テラス、2号建物跡（1/200）

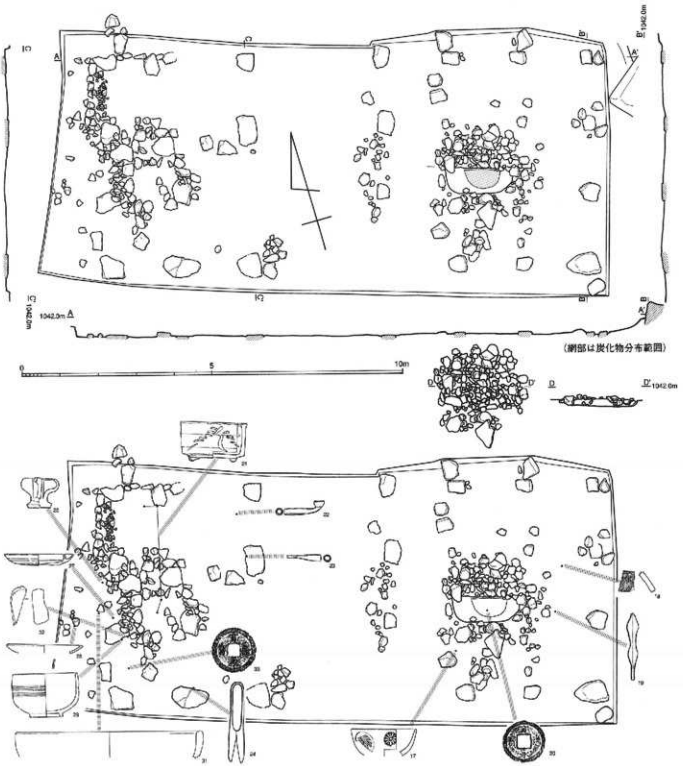


図12　2号建物跡と遺物出土状況（1/100）

西南の3面に1間分の庇（あるいは裳）の礎石列をもち、全体では5間×3間となる。東側と西側の軒端ラインが5号石積の延長線上に一致するように設計されている。

身舎部分は直径最大1.5mの大きな平石を用い、その礎石間隔は2～2.2mである。いずれも大きな花崗閃緑岩の礎石だが、とくに正面東西列は大きく、とりわけ正面左から2番目の礎石は、細かく波を打ったようなシワをもち、他の礫とは異なる肌目の流紋岩で、直径1.5mとひときわ大きい。おそらく正面からみて床下に見える位置であることから、見栄えの良い、変わった石を据えたのであろう。覆土は表土が腐葉土および黒褐色土で、礎石下面が黒褐色土中に黄褐色土ブロックが混じる面となる。全くの地山ではなく、整地面

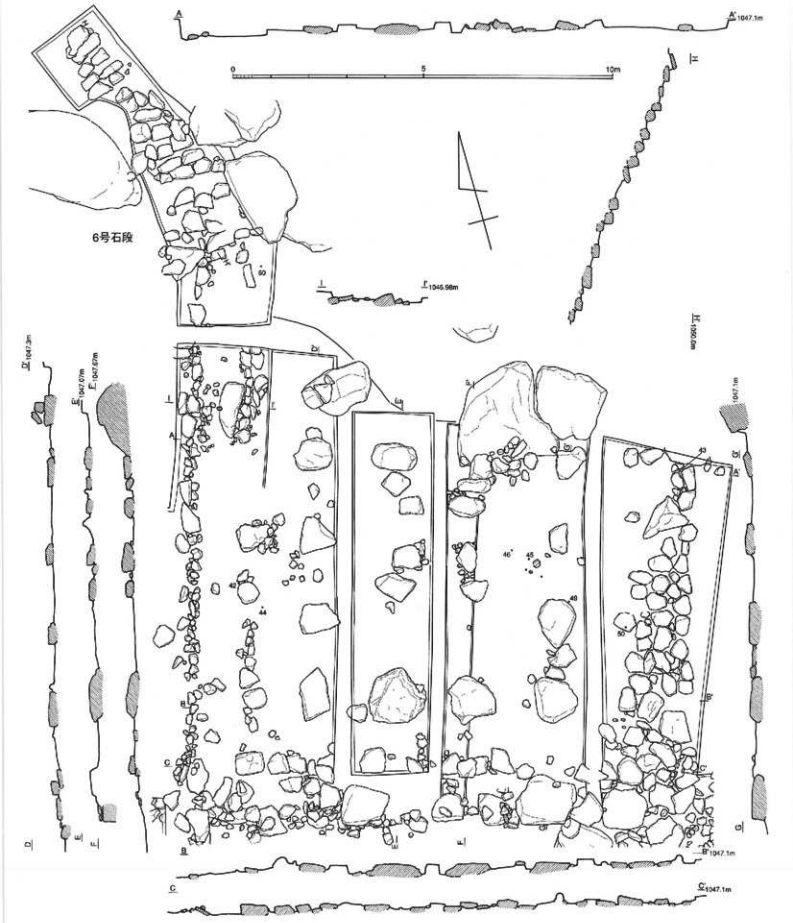


図13　3号建物跡・6号石段（1/100）

に礎石を据えている。焼土粒はなく、わずかに微細な炭化物が薄く確認されたが、火災等で焼失したような形跡は皆無である。

建物北側には、建物中心軸から東寄りの位置に大きく割れた巨石があり、地山から約1.2mと高く突き出して立つ存在である。この石があることから北側の庇列はないという先入観で調査にあたったが、実際には裏側の庇は未調査であり、巨岩さまたぐように北側1間分の庇が存在する可能性も捨てきれない。

身舎の中心奥寄りには4つの礎石からなる須弥壇（厨子）跡がある。東西1.7m、南北1.5mで、直径60～70cmの平石を用い、須弥壇を支える床下の礎石と考えられる。礎石周囲には小礫がいくつか配置されているが、石の直下にはなく、礎石の根固め石ではない。須弥壇中央を通るようにベルトを設定し、ベルト断面および確認面で掘り込みの有無を調べたが、とくになにも確認できなかった。須弥壇の礎石に接するように細長い礎石が対に4個存在する。須弥壇の僧石と同規模で、周囲の礎石に比べると小さい。それらは大引を支える東石の僧石であり、床は板貼りと考えられる。

庇（あるいは裳）部分の礎石配置は、いくつかの欠落や移動があり必ずしも明確ではないが、東西南の3面にある。礎石直径は50cm～1mで、西側手前では礎石間をつなぐように列石が部分的に認められた。西側の西北隅には僧石がなく、6号石段へ通じる石列となっている。正面（南側）の庇列の礎石部分は、平石を直線的に並べたようになっていて、前に並ぶ5号石積の一部として構築されているように見える。また正面、5号石積中には2個の大きな礫があり、向拝の礎石の可能性が高い。東側には、10×1.8mの範囲で、平石を南北の帯状に敷き詰めた敷石遺構が検出され、その一部として同レベルで庇列と考えられる礎石が配置されている。庇（あるいは裳）の礎石は、外縁の束柱の礎石の可能性もあるが、雨落ちラインの列石を軒端ラインとすると、軒の出が非常に長く、軒を支える柱が必要となる。礎石が貧弱なことから壁を伴う礎石ではなく、柱のみの開放的な外縁、あるいは裳と思われる。

東側の敷石は通路と考えられるが、敷石の奥寄りには三角に尖った自然石が高さ43cmと突出しており、通行には邪魔な存在となっている。西側に6号石段が検出されたように、東側にも8号テラスへ上るための通路が存在したと思われ、左右対称的な遺構群の配置から考えると、敷石の先に石段が存在する可能性が高い。

3号建物跡がこの位置に設計された理由として、裏側の割れた巨岩が磐座にもつていたのではないか、という想像ができる。ただ岩の位置は遺構群の中心ではなく、わずかではあるがはずれており、岩の手前でとくに祭祀を実施した跡も検出されなかったことから、可能性は弱いと考えておく。

遺物は建物付近から15点が検出された。東側敷石付近からは、敷石面直上付近から混美の甕片が1点出土している。また西側では覆土中から「祥符通宝」1点、青磁碗片が出土した。須弥壇東側の奥寄りの部分からは、礎石下面よりやや上で輪羽口破片がややまとまって出土し、鉄滓も出土した。小鍛冶遺構は伴っていないが、仏堂建立にあたり、造営中の堂内で小鍛冶的な作業が行われた証拠と考えられる。

4号建物跡（図版6）

2004年度の調査では、5m四方の調査区（C1地点）を中心に礎石6個以上が発見され、3間×3間の礎石建物と考えられた。遺物は鉄石、角釘、土師質土器片などが11点が出土している。土層は1層―黒褐色土で根を主とする表土層、2層―暗褐色土（地山ではない）。

2005年度の調査では、東西ベルト1本を残して全体的に礎石配置がわかる程度に掘り下げた結果、2間×4間の総柱と考えられる礎石建物跡と判明した。東西4m、南北8.8mの南北に長い建物で、主軸方向はN-16°-Eである。礎石は直径60～90cmと全体に大きい。礎石間隔は南北（梁間）2.2m、東西（桁行）2m。5号石積に近い南、西列付近には、礎石以外にも大型の平石が配置され、礎石配置がわかりにくくなっている。遺物は土師質土器1点が出土したのみである。

北側は5号石積、中央東西ラインの延長線で東西方向の列石があり、その中にも礎石らしい平石が点在している。東北の隅には巨石があって、建物配置を規制しており、北側の石列もそこで止まっている。

東側は、正面の5号石積が途中で折れ曲がっていることから、4号建物の範囲を示していることがわかるが、調査区からはずれた位置でピンポール探査を行って、石に当たる所のみ坪掘りを行ったところ、やや小型の礎石らしき平石が配置されている様子が確認された。9号テラスの平坦面はさらに東へ続いていることから、4号建物跡の東側に別の礎石建物が存在するらしい。

5号建物跡（図版6）

2004年度では未着手であったが、2005年度にはピンポール探査で礎石列が推定されたため、礎石列に合わせてトレンチを4本設定し、礎石配置を確認することとした。

その結果、東西に長い4間×3間の礎石建物跡が検出された。東西8m、南北6.6mで、主軸方向はN-16°-E。礎石は直径60～140cmで、礎石間隔は東西（桁

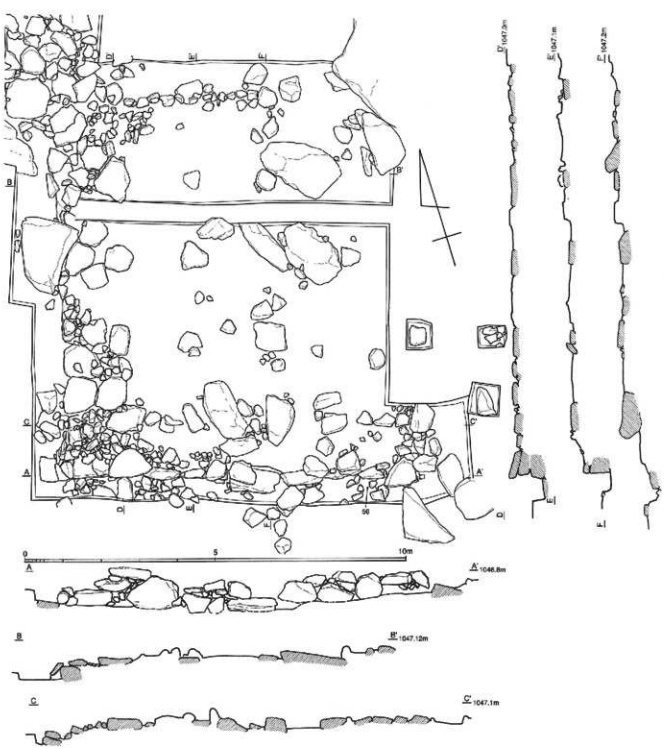


図14　4号建物跡（1/100）

行）2.0m、南北（梁間）2.2mである。遺物は土師質土器1点が出土したのみである。

トレンチ内で確認した礎石中、西側の礎石列（西列）は南端から2・3番目の礎石が欠落し、2番目の位置には礎石の移動痕と思われる黒褐色土の落ち込みが確認された（図15、D-D'ライン）。半裁して様子をみたところ、中には小礫が数個存在したが、根石ではない。土層は1層－黒褐色土、2層－暗褐色土（黄色ブロック混）である。また、さらに西側にもう1間分の礎石列が存在したかどうかについては、現状のテラスが西列の脇で落ちていることから、東西4間で完結するものと考えられる。そのほかの礎石は、北西隅の礎石が傾いて移動しているほかは全て良好に遺存している。礎石列の内側の礎石の有無については、2箇所で礫が露出し、1箇所でピンポール探査により存在が推定できているが、4号建物跡のように総柱構造の礎石配置

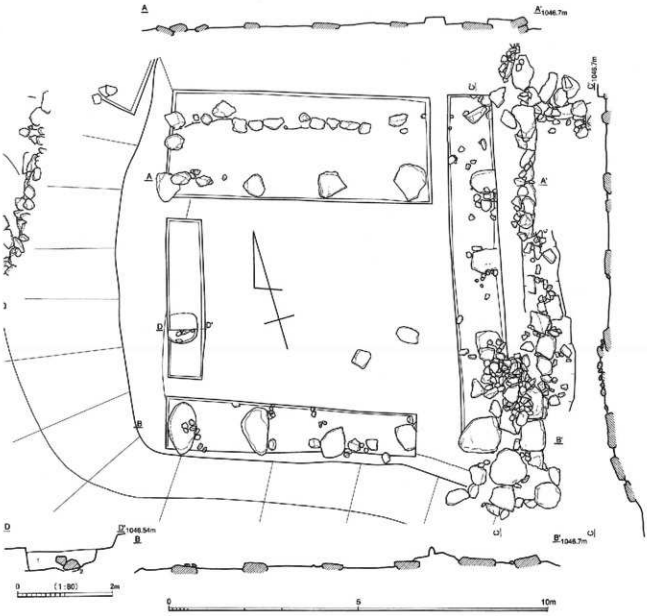


図15　5号建物跡（1/100）

をもつ構造であったかどうかは不明で、今後の調査を待ちたい。なお、南列、西端から2個の礎石は長軸長1.3～1.4mの楕円形の大型礎石で、長軸方向を南北に据えている。テラス面が盛り土造成のため、南側に向かって崩れやすい性質を考慮した礎石配置であろう。実際に礎石ラインから南側は崩落したらしく、南列はテラスの肩にかかるように検出されている。石材は花崗閃緑岩で、丸味があることから河原からの搬入礫かと考えられる。

北側については、5号石積の中央東西ラインの延長線上に石列が検出された。北側礎石列から1.5m離れ、トレンチ幅、7mの長さで検出され、軒端の雨落ちラインに相当するものと思われる。個々の石は小さな平石を用い、それらがわずかに外傾しており、5号建物跡の基壇部分が周囲よりも高くなっていたことがわかる。

3　石　組

1号石組（図版7-5・6）

1号石組は3.5×2.5m、高さ約1mの小型長方形で、石積の石は大型礫を1～2段積み上げ、安定した造りである。

2004年度には1号石組南側に4m四方の調査区を設定し、表面的な調査を実施した。その結果、やや小型の礎石的な平石が2個検出されている。遺物は出土していない。石組の性格は定かではないが、小祠を設置する基壇のようである。位置的に2号建物跡との関連が考えられ、境内に祀られた末社跡かと思われる。

4　石　段

1号石段

1号テラスと2号テラスを結ぶ石段。標高は1061m～1068m。幅1～2m、長さは23m。

2004年度調査では清掃発掘を行った。土層は1層－黒褐色土、2層―明黄褐色土（地山）。降雨時には1号テラスの雨水が流れる流路となり、石段部分は清状に窪んでいる。2号石段とは異なり、礫を階段状に整然と並べたものではなく、通行しやすいように突出した石を割り、くぼみに石を詰めている。矢穴をもつものが目立ち、露出した岩を割りながら石段を整備したことが伺える。矢穴形態は幅5.7cm、長さ5cm以上で、幅が狭く、江戸期以降の矢穴と考えられる。

出土遺物としては剣形鉄製品、古銭があり、いずれも礫の隙間にはさまるように出土した。構築時期は江戸期であろう。

2号石段

2号テラスと5号テラスをつなぐ長い石段で、標高は1042m～1058m。幅約2m、長さは45mである。石段はおおむね直線的であるが、一部地形に応じて「く」の字に曲がっている。また途中の7号テラス付近には、石段を整備・構築した際に片付けられたらしい石材がまとめて積み上げられている。

調査は2004年度に実施され、石段を全面にわたって清掃発掘した。調査前は、石が部分的に見え隠れした状況で、調査によって石段が全貌を現すこととなった。覆土は1層－黒褐色土、2層―暗褐色土。厚さ1～20cm。

石段は1段につき3～5枚程度の平石を、面をそろえて横長に並べ、6号石段と基本的には同じ積み方である。ただ6号石段と違って2枚重ねた段もいくつか認められる。

石段の中間やや上にある屈折点を境として石段を上下に分けると、出土した遺物11点中、10点は上からの出土で、2号テラスからの流れ込みが著しかったことを示す。遺物には陶磁器、土師質土器、土鈴がある。

本石段中には1号石段に見られた矢穴が皆無で、江戸以前に整備された可能性がある。ただ、一部参道に敷かれた砕石が石段下に入れられ、一部の石段は明らかに植樹した立ち木を避けるなど、最近の整備の痕跡が認められるほか、一部の段は細かな石材を縦長に並べるなど、明らかに新しい敷設状況が見て取れる。片付けられた石材があることから、古い石材を用いて再整備したか、補修したような印象を受ける。段数は55段あり、明治36年の「金桜神社之景」記載の「五十五石段」に相当する。

図16　1号石段の矢穴

現在の神社関係者に石段整備のことを知る人はないことから、整備されたのは明治36年以前と思われるが、当初の構築時期は2号テラスの配石と同時期（12・3世紀以前）か、あるいは中世段階の可能性がある3号石積と同時期と思われる。とくに9号テラス東端と2号石段をつなぐ4号通路から上については、2号テラスと同時期の可能性がある。

3号石段

5号テラス南側、19号テラスから入り口の鳥居方向へ向かう斜面に設けられた石段。標高1037m付近で、幅約2m、長さ15m。

2004年度に清掃発掘が行われ、中央に高い面をはさんで北側に6段、南側に4段が検出された。土層は1層―黒褐色土、2層－暗褐色土。覆土厚は3～30cm。

遺物は陶磁器など13点である。5号石段の向きからすると、本来、5号テラスに至る道は沢筋と平行して南方に伸びていたと思われるが、現状ではそうした山道は認められない。あるいは3号石段の位置が当初からの道の可能性もある。

4号石段（図版7-2～4）

9号テラスの南縁中央に位置する石段。幅約2m、長さ11.5mと細長い。石段面には植林された2本のスギが大きく成長しており、石段を崩しつつある。

2004年度調査では清掃発掘を行った。土層は1層―黒褐色土、2層－暗褐色土で、覆土厚は5～10cm。土師質土器が4点出土した。

礫混じりの土盛りによって細い傾斜面を造成し、平石を置いて石段としたもので、南端の数段の石を除き、石の多くは原位置から移動し、崩落して段数を確かめることは難しい。石段両側面には、わずかに石積が認められる。石段脇の9号テラス側面には4号石積が構築され、石段とテラスの接点を補強しているかのようである。

2005年度調査では、石段の西脇にトレンチを設定して石段の構築面を探るとともに、石段上端部にトレンチを入れ、状況を探った。石段脇トレンチの調査では、覆土が淡い黒褐色土で、石段の構築面を見極めることができなかった。おそらくテラス盛り土と旧地表面の表土が重なり、厚い黒褐色土の堆積となっている。石段上端ではテラス肩部から大小の石が検出され、石段端部の状況を確認できたが、植林の影響で多くの石は

移動している。

5号石段

5号テラスの3号石積に付随する石段。3号石積の中央西寄りに位置し、石段中心ラインと2号建物跡馬道の中心ラインはほぼ一致している。2004年度に石積下部について清掃発掘を行い、全体像を確認した。

石段は幅3.5～4.2m、長さ5mで、10段あり、1段の奥行きは40～80cm、高さ約30cmである。1段に4～5個程度の平石を配している。4号石段と比べると幅広で、側面にも石積があるなど相違点がある。3号石積と同時期に構築された石段であることは明らかで、中世の構築かと思われる。

6号石段（図版5-5）

3号建物跡北西隅から背後の12号テラスに上るための石段。2005年度調査において、3号建物跡西側の雨落ちラインとされる石列を北へ追ったところ、途中から2列の通路状列石となり、その続きに16段の石段が巨岩の間を抜けるようにして、斜めに12号テラスに取り付いて検出された。旧状では苔むした岩があり、その間が腐葉土で全て覆われ、やや緩やかになっており、最上段の右のみ、一部露呈していた。ほぼ完全に理没していたため、全体に遺存状況はよい。

覆土は1層―腐葉土、2層―黒褐色土、3層―黄褐色土で地山に類似。下方の石段は3層中から検出されている。遺物としては、L字に曲がった鉄製品1点が石段の最下段付近から出土した。

7号石段（図版3-7）

2004年度調査。2号テラスで検出された石段。礎石建物南側に接するように存在し、幅3.1m、長さ1.5mの3段が確認されている。1段は奥行き50～60cmで、横長の平石を3～4個並べて1段とする。他の石段に比べ、1段の高さが低い。東側にも凹状に下がって同様な石段らしき礫が見られ、複雑な構造を呈した場の可能性もある。今後の調査が待たれる。

5　石　積

1号石積（図版3-4・6）

2号テラス南縁の石積。2号テラスでは沢に近い東側にのみ石積をしてテラス面の造成を行っている。石積は2-2号テラス東端から2号石段の脇までの間にL字状に作られており、ここでは2号テラスに面した直線部分を1-1号石積、東側が南に折れ曲がった部分を1-2号石積と分ける。

1-1号石積は長さ18mで、巨礫を中心に1～3段程度の石積によって高さ約1mの段差を構築している。石積の状況、巨礫の用い方は9号テラスの5号石積、1号石組に似ている。石積下部は埋没し、未調査。西端は斜面下方へ屈折している。

1-2号石積は列状で、石積の状況も異なる。長さ5m。1-2号石積に取り付くように設けられていることから、1-1号石積よりは後出である。未調査。

2号石積（図版7-7）

3号テラス南縁の東西方向の石積で、西側はL字状に北に短く曲がる。9号テラスのほぼ真裏にあり、9号テラスから見ると3号建物跡の上に位置する。小振りの石を2段程度に積み上げた石積で、途中が山道によって崩されているが、全長7mの石積である。未調査。

3号石積

5号テラスの石積。従来よく知られた場所で、2004年度には清掃発掘とともに、埋没した石積下面までの調査が行われた。

南面の石積は、中央に5号石段をはさんで長さ18m、高さ1.3～1.5mあり、石積技法としては横長に礫を見せて3～4段平積みしたもので、石段東側では意匠的に大振りの多角形礫を配置したらしい箇所がある。東面は北に10m折れてテラス南半分に関して石積を構築する。西側については巨礫を縦長に配し、境界としているように見える。石積下面までの土層は1層―黒褐色土、2層―暗褐色土。石積前面からは崩落した礫が検出されている。

5号石段とともに、全体的に他の石積に比べできわめて整然としており、後出的な印象を受ける。

4号石積

9号テラス南縁、5号石段両脇の石積。石段東側では石積が一部露出していたことから、2004年度に部分的に調査したところ、高さ1.5m、幅3.5mの石積が検出された。石は平たく割れた礫を平積している。さらに東側に礫の一部が続いて見えることから、石積がさらに長く伸びているのは確かである。

石段西側については、現状では一部重なった礫があるが、明確な石積はない。2005年度に石段西側にトレンチを設定し調査したところ、わずかに2・3段積み上げられた石が確認された。

5号石積

9号テラス面のコ状の石積で、建物群との中央広場空間との間に石積で段差を設け、建物が一段高くなるように基壇を形成している。南側、5号石段に向かって開口し、中央東西ライン、東側南北ライン、東側東西ライン、西側南北ラインの直線の組み合わせとして分解できるが、それらは一連のものとして構築されている。

2005年度の調査前の状況では、50cm程度の段差の石

列のようにみえたが、石の下端を辿って掘り下げたところ、1～2段程度の石積であることがわかった。そこで、東側南北ラインと東側東西ライン脇に幅1m程度のトレンチを入れ、石下端まで掘り下げた。

調査の結果、中央東西ライン11.5m、東側南北ライン9.7m、東側東西ライン11m、西側南北ライン10mで、東側南北ラインは段差1m、2段程度の石積で、ライン上に大型の自然礫を取り込んでいる。一部西側に崩れた礫があるが、おおむね遺存状況は良好である。南端のコーナー部分には大型の角礫を用い、隅石にふさわしい石を据えている。またその脇には、トレンチ内に礎石状の礫が1個確認され、広場内の東西ラインの延長線上に、建物あるいは塀などの何らかの施設があった可能性がある。東側東西ラインは巨岩を多く用い、2～3段程度の石積で1mの段差を形成する。礫は南側にいくつも崩れ、現在積まれている石も不安定な状況にある。

正面にあたる中央東西ラインは、下面を調査していないが、直径1～1.6mもの大型の石を礎石状に一定間隔で並べている。そのうち2個は3号建物跡正面の向拝の礎石かと考えられる。西側南北ラインも下部は未調査であるが、正面に比べると小型の石を主体とする。上部の礫の崩落はとくに顕著である。

5号石積が左右対称形であれば、西側東西ラインの石積の存在も想定されるところであるが、5号建物跡の礎石列がテラス南縁から検出され、テラスの縁がかなり崩れていることが判明し、当初は存在した可能性が強いものの、崩落していることが推定された。

遺物としては、東側東西ラインの石積手前から剣形かと思われる板状の鉄製品が出土している。そのほか釘、直径1～3cm程度の炭化物がわずかにある。

6号石積（図版7-8）

9号テラス西縁の石積で、テラス基底部に小振りの礫を低く積み上げている。南北方向に約8m直線的に配され、南端はテラス端まで続く形跡はなく、途中で止まっているようにみえる。

7号石積

8号テラス南縁の石積で、9号テラス北東にあり、東西方向に直線的に配された石積である。長さ7mで、小型の礫を2段程度積み上げ、低い段差を形成している。東端は小さく南へ折れ、巨大な自然礫の集積へとつながっている。

8号石積

12号テラス南縁の石積。下の13号テラスとの境にあり、東西方向に12m連なる。小振りの礫を中心に3段程度積み上げ、約1mの段差を形成している。未調査のため、石積下端は未確認であるが、基底部はさらに深く埋まっている。現状では中央が大きく崩れ、降雨時の水の道となってえぐれ、奥社方向へ向かう山道となっている。

9号石積

10号テラス南縁、中央付近に並ぶ石列で、現状では7個ほどの礫が約9m、直線的に並ぶ。下のテラスとの段差は小さく、石積ではなく単なる石列かもしれない。

10号石積

2号通路遺構の南端にあたり、巨礫の周を屈折しながら通路状の山道が存在する。その両脇に小振りの礫を積み上げた石積がみられる。この付近には顕著な遺構がないが、西側には低い尾根の先端が丸い塚状を呈して存在し、東側は緩斜面がわずかに高まりをみせ、それらに挟まれて谷状の地形となっている。その中央にあたり、しかも5号石段から南進した位置にある。石積はかなり貧弱ではあるが、本遺跡の中核的なテラスである9号テラスへ至る正面の入り口と考えておきたい。

なお、10号石積の西側には、わずかな段差状の地形がうかがえ、石列状の礫も存在することから、境界としての地形的な造成がこの付近に加えられているのではないかと考えられる。

11号石積

4号石段下、10号テラス北東の2号通路脇に見られる石積。3.5mにわたり、小振りの礫をならべている。

6　通　路

1号通路

13号テラスと20号テラスをつなぐ尾根際の通路で、山すそに通路が設けられている。全長25m、幅約1mで20号テラスも通路の一部分かもしれない。未調査。

2号通路

9号テラスから5号石段を通り、10・11号テラス脇を南下する直線ルートで、わずかな切り面として確認されるものの、不明確である。途中、10号テラス北東に11号石積があり、その南には10号テラスへつながる通路らしき斜面がある。南端では石の間を蛇行して下り、南端には10号石積が存在する。その間、全長70m、幅約1mである。その先は、現状では定かではないが、地形のコンタラインをみると現在の鳥居を通過する参道ルートに本来の道が存在した可能性が高いほか、林道塩平徳和線を横切って真直ぐに南下するルートも考えられ、わずかにくぼんだ通路らしき状況もうかがえる。ただし林道や別荘などによって旧状が不明となり、林道下の遺構群との関連性がはっきりしない。未調査。

3号通路

14号テラスから15号テラスへ下る通路で、長さ9m、幅1.5m。15号テラスからさらに下に下る山道があり、それにつながるものと思われる。未調査。

4号通路

9号テラス東端から2号石段へつながる道路。長さ約10m、幅約1mで、斜面側には巨礫を利用した石積が存在するらしい。9号テラスと2号テラスを結ぶ確実なルートで、2号石段も2・9号テラスと同時期の可能性がある。未調査。

7　その他の遺構

西側尾根、先端の丸い塚状地形の頂部には、礫が寄せ集まったような集石があり、経塚、あるいは結界としての地鎮具の埋納遺構等の可能性が指摘されていた。2005年度調査の中で周囲の表土のみ剥いだところ、小礫を主として多数の礫が広がりをみせ、一部は地山内にももぐりこみ、人為的な石積や焼土、炭などは未確認であったことから、当初予想された経塚ではなく、自然の礫堆積と判断した（写真6）。

14号テラス上の尾根のピーク中央には炭窯跡と思われる丸い落ち込みがある。また1号テラス北西の斜面には石積で構築された炭窯がある。戦後、あるいはそれ以前のものであろう。

8　林道南の遺構群

林道南の標高960～970m付近の山林中には、テラス群が存在する。奥社地遺跡のある南緩斜面を琴川に向かって下った、台地縁辺を中心に分布している。

奥社地側から林の中を南下する行き方のほか、逆に鳥ノ口橋方面から北上する行き方がある。琴川にかかる鳥ノ口橋を左岸に渡り、車道から離れて山道に沿って北側斜面を登ると、斜面に沿って小テラスが3枚ほど連続し、続いて東西に長いテラスが3枚ほどある。テラスは最大例で東西100m、南北30m以上で、いずれも南縁に石積を伴う。テラス中には長方形に石積と列石を組み合わせた石組が1箇所ある。さらに北側にも小規模なテラスが2～3枚存在する。山道に沿ってさらに北上すると、林道脇に近年、林道工事の廃土で造成された巨大なテラス3枚があり、奥社地入り口にたどり着く。そのほか、西側の沢中には方形の枡状石組があり、石組で整えられた水場と思われる。

これらのテラス群については全く未調査であるが、石積の構築状況が奥社地の3号石積に類似し、同時期の構築の可能性がある。明治28年の絵図には、奥社地のテラス群を示す図の南側にテラス群を示す表現があり、林道南の遺構群についても旧社地の一部として認識されていたことが伺える（図4）。

9　尾根上の遺構

現在、奥社が祀られている1号テラスを北上すると、岩場が広がる急斜面を経て、岩が累々と重なった尾根先端に出る。そこから東御殿と大鳥山を結ぶ尾根線までの間、岩場が続く細い尾根が伸びている。ところどころに岩陰や自然の岩屋があったり、岩が重なった磐座のような巨岩があったりする。登山道としての道はないものの、修験者が行き交うには格好のルートといえ、奥社が設置された理由の一端を示しているように思われる。

2005年度調査のなかで、山本義孝氏を尾根道を案内したところ、途中、山本氏は拝所らしき石組を発見し、作図していただいた（図17、図版2-7）。3.4m四方で、

写真7　西側尾根先端の自然礫

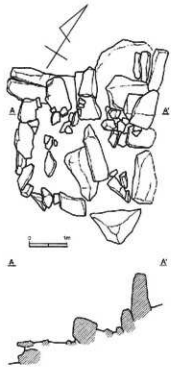


図17　尾根上の拝所？（山本義孝原図）

東側に立石状の自然石を配し、人為的とも見られる石積が一部に行われている。山本氏によれば、尾根の後線西側にあって、尾根越しに東側に望む東御殿の峯を拝む場所ではないかと説明された。

第4節　遺　物

出土遺物は次の通り。奥社関連遺物として10世紀から19世紀までの遺物があるほか、古い時期では縄文前期初頭、縄文前期末、弥生後期～末の土器片がごくわずかに含まれ、縄文時代の黒曜石剥片、チャート製石器も存在する。また火打石等として利用されたのか、石英の小さな破片が各地点で出ている。

1号テラス（1号建物跡）出土遺物（図18）

鏃（かすがい）状鉄製品（1・2）、鉄製角釘（3～5）、砥石（6・7）がある。

1は長さ12.8cmでコ状に折れ曲がり、2は長さ14.3cmで、湾曲しながら曲がる。土師質土器は未確認で、中世以前に遡る資料を欠き、江戸期以降の所産であろう。そのほか、鉄製楔1、石英1がある。

2号テラス（E1・2地点）出土遺物（図18）

土師質土器（8～11）、瓦質土器鍋（12）、土鈴（13）、剣形鉄製品（9）、土錘（14）、不明鉄製品（15）、角釘（16）がある。

8・10の時期は不明だが、8は12世紀代まで上る資料か。11は柱状高台で12世紀後半か。12の瓦質土器は15～16世紀。14は12世紀頃の土錘かと思われる。9は剣形の中では非常に小さい。13は近世の土鈴で、遺跡調査では各地から発見されている。県内では「虫切の鈴」として子供が身につけるもの、御岳金桜神社の「御岳の鈴」が有名である。後者については御岳詣の登拝者らが身に付けたものとされ、甲斐金峰山勝手社跡では寛永通宝とともに採集されている。そのほか実測外遺物としてE1地点から土師質土器皿片6、土師小片3、石英2、E2地点から土師質土器皿片13、土師器皿（10～11Cか）1、土師甕片2、土師小片9、土錘片1、混美？陶器甕片1、弥生後期？壺1、黒曜石剥片1、円礫1、石英10が出土している。またE地点の表採資料として土師質土器皿片8、土師小片8、鉄？滓1がある。

E2地点を中心に土師質土器が多数存在し、12～13世紀の資料が見られることから、その頃までにテラス面が存在したことは確かで、それ以前と思われる資料もあり、何らかの建物が設置された可能性がある。7号石段、礎石はその時点での設置かと思われる。その後、中世、近世まで遺物が断続的に存在することから、9号テラスとならび奥社地の中でも中心的な場であったことがうかがえる。

5号テラス（2号建物跡）出土遺物（図18）

17～25・30は2004年度、26～29・31～33は2005年度調査時出土遺物である。

磁器碗（17）、常滑系甕（18）、剣形鉄製品（19）、香炉（21）、煙管（22・23）、鉄製和鋏（24）、砥石（25・32）、寛永通宝（20・33）、灰釉壺（30）、鉄釉灯明具（26）、灯明皿（27・28）、鉄釉碗（29）、土鍋（31）がある。

遺物の主な出土位置は、2号建物跡内の馬道をはさんで東側と西側に分けられる。東側から17～20が出土し、とくに中央集石下層から20の寛永通宝が出土した。21～33は西側の西寄りを中心とした出土である。

17はくらわんか碗で、18世紀前半～中頃、21は尾呂の鉛釉が施釉された香炉で、17世紀末（第4四半期）～18世紀代前半。20は寛永通宝で、1740年頃か。22・23の煙管は形態から19世紀と思われる。18は常滑あるいは渥美と思われる甕の小片で、13世紀に遡る可能性のある資料であるが、細かな年代は不明。26～29は美濃と思われる陶器。26は完形の鉄釉乗燭で、口径4.5cm、高さ4.5cm。口縁部は内湾し、中心には芯立て部が立つ。18世紀前半（第2四半期）～中頃か。27は内面に立ち上がりをもち、一部を欠失した灯明受皿で、18世紀後半（第4四半期）かと思われる。28は灯明油皿。29は外面中ほどに条線をもつ腰錆碗で、外面条線上から内面にかけて灰釉、外面条線下から底面に鉄釉を施釉する。18世紀後半（第4四半期）か。30は時期不詳であるが、近世の灰釉かと思われる。そのほかの資料としてD1地点では土師小片2、弥生末？壺片1、近世灰釉壺1、D2地点では近世灰釉碗2、くらわんか碗2、土師小片3、石英1がある。

18の甕片と19世紀代とみられる煙管を除くと、18世紀後半以前でまとまっている。鉄釉の美濃製品が時期的に揃い、生活雑器の陶器類のほか、銭、煙管など日常品が見られる。2号建物跡は社務所的な施設であったろうか。建物の廃絶時期は18世紀後半頃かと思われる。

9号テラス（3号建物跡）出土遺物（図19）

青磁碗（42）、渥美？甕（43）、鞴羽口（45・46）、中国銭（44）、角釘（47・48）、鉄製品（49）、鉄滓（50）、蹄鉄（51）、染付碗（52）がある。

42は3号遺物から出土した竜泉窯の青磁連弁碗。色調は緑黄灰色。12～13世紀か。43は東側敷石中から出土した渥美甕片で、8cm程度の小片。外面には全面ではなく帯状に平行叩きが行われ、板目圧痕中に「米」状の文様があり、器面の3箇所に認められる。注文品

として米沢寺の「米」を叩きに用いた、という解釈は無理があるか。時期は12世紀前半前後であろう。44は3号遺物跡西側覆土中出土の「祥符通宝」。北宋銭で初鋳年代は1007年とされる。鞴羽口、鉄滓、鉄製品は3号建物跡内北東部分の近い位置から出土し、建物敷地内で小鍛冶が行われたことを物語っている。45・46は同一個体と思われる。49はどのような製品か不明で、やや厚く重量感があることから鉄素材、あるいは工具の一部かと思われる。51は近代の馬の蹄鉄で、長さ11cm、幅10.8cm。裏面から左右4本ずつ計8本の釘を打ちこんでいて、接地面は表面が丸く磨耗する。

3号建物跡は本遺跡の中心的な建物であるが、その割に遺物量は少ない。もともと日常的な生活雑器がもちこまれない空間で、聖域として清潔に保たれていたのであろう。小鍛冶関連の遺物は、建物建立の際に行われた小鍛冶関連の遺物で、床下空間に遺棄されたと考えられる。角釘等の製作を行ったものと考えておきたい（出土地点については図13参照）。

9号テラス（4号建物跡、C1地点）出土遺物（図19）

遺物の出土量は少なく、角釘（34）、砥石（35）がある。ほかにC1地点として湿美・常滑系甕片1、土師質土器皿片1、土師小片4、チャート製掻器（あるいは楔状石器）1、石英2がある。

9号テラス（5号建物跡）出土遺物（図19）

土師質土器（53）が1点出土したのみである。12世紀後半代か。

9号テラス（広場、C2地点）出土遺物（図19）

図化資料はないが、土師質土器皿片1、土師小片1が出土している。

9号テラス（C3地点）出土遺物（図19）

3号建物跡西辺の雨落ちライン西側の出土品として、土師器（36・37）、上鍋（38）、磁器甕（39）、紅皿（40）、角釘（41）がある。

37は甲斐型土師器坏に類似した断面形態の白色土師器で、外面口縁部が帯状に黒変している。白かわらけに似た白色の色調を特徴とし、時期的には10世紀前半～後半か。39は呉須で梅等の文様が描かれた19世紀後半の瀬戸の急須蓋。40は白色の磁器で、蜻蛉草を印刻した紅皿であり、18～19世紀代か。38の土鍋は2号テラス14類似の土器である。そのほか灰釉皿片1（近世か）、土師小片6、炭化材（2～3cm）1がある。

9号テラス（5号石積）出土遺物（図19）

5号石積脇から出土した遺物として、磁器碗（58）、不明鉄製品（56）、角釘（54・55）、磨り石（57）がある。

56は両端を欠損する板状鉄製品で、一方が幅広であることから、剣形ではないかと考えられる。4号建物跡南側（東側東西ライン）の5号石積下面に近いところからの出土である。54は4号建物跡西側（東側南北ライン）、55は南側（東側東西ライン）から出土（図14）。

9号テラス（5号石段脇）出土遺物（図19）

遺物の出土は少なく、角釘（59）のほか、土師質土器片がある。

12号テラス（仮称西沢1・2地点）出土遺物および表採資料（図20）

甲斐型土師器皿（61）、土師質土器皿又は坏（62・64～69）、柱状高台土器（70・71）がある。64～71は表採資料である。

12号テラスには降雨時に生じる流れによって自然流路が形成された仮称西沢があり、その周辺で比較的多くの土師質土器が以前に採集されている。採集品の中でも柱状高台は時期が限定的で、12～13世紀前半に限られる。底部端部の形態から編年的位置づけが検討されていて、幅広の稜を呈する70は柱状高台の中でも新段階で、13世紀前半と考えられている。62・64～69は破片では時期決定が難しいが、厚みのある62～66は12世紀代の可能性が高い。

61は奥社地の最古段階を示す資料で、10世紀前半の甲斐型土器皿である。甲斐型土器はただ1片のみであるが、この段階に山内が開創された可能性を示す資料といえる。63は環状の鉄製品。そのほかの出土遺物として西沢1地点から土師小片2、上師質土器皿1がある。西沢2地点からは土師質土器皿片4、土師小片1、鉛製鉄砲玉1、炭化材（1～2cm）2がある。表面での採集資料が多いのにもかかわらず、トレンチからの遺物の出土量は少ない。

13号テラス出土資料

図化資料はないが、土鍋片または縄文土器片かと思われるもの2点が出土している。

1号石段出土遺物（図20）

剣形鉄製品（72）、鉄鉄（73）がある。

72の剣形鉄製品は長さ31cmと長く、先端は鋭角に尖る。端部には折りがあり、打ちつけるなど固定されていたことを示している。時期は不明であるが、おそらく江戸期であろう。73は鉄鉄で、県内では飯田鉄と呼ばれる寛永通宝に該当する。信仰遺跡では奉賽銭としてよく見られる。そのほか18世紀代の碗片1がある。

石段1には矢穴をもつ割石が用いられていることから江戸期の構築と考えられているが、出土遺物も江戸期に収まる。

2号石段出土遺物（図20）

仏飯器（74）、悠利（75）、小皿（76）、土鈴（77）、内耳土器（78）がある。

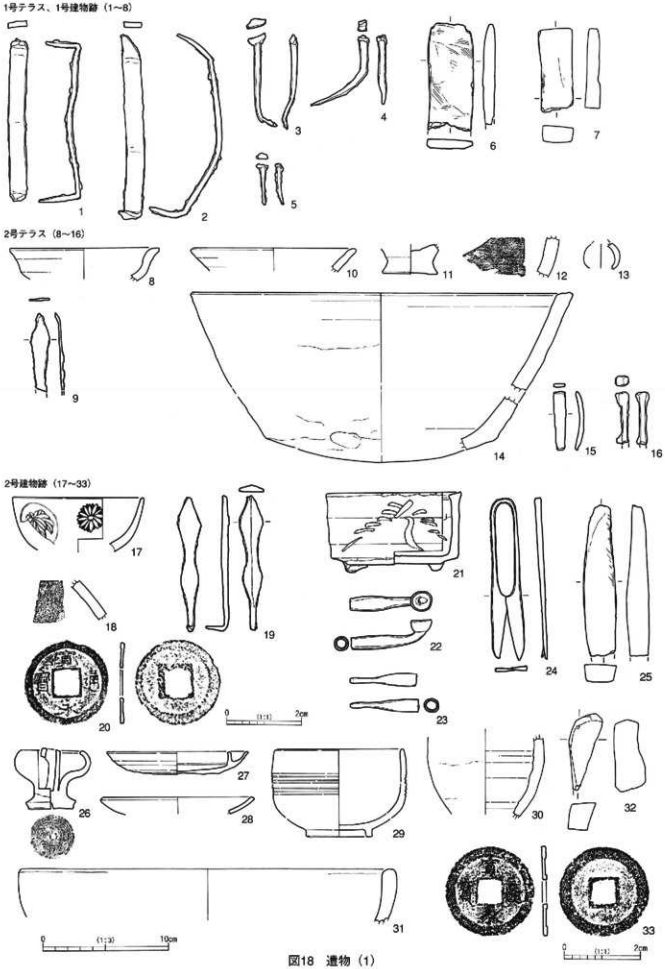

1号テラス、1号建物跡（1～8）
1
2
3
4
5
6
7
2号テラス（8～16）
8
9
10
11
12
13
14
15
16
2号建物跡（17～33）
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0 (1:3) 10cm
0 (1:3) 2cm

図18　遺物（1）

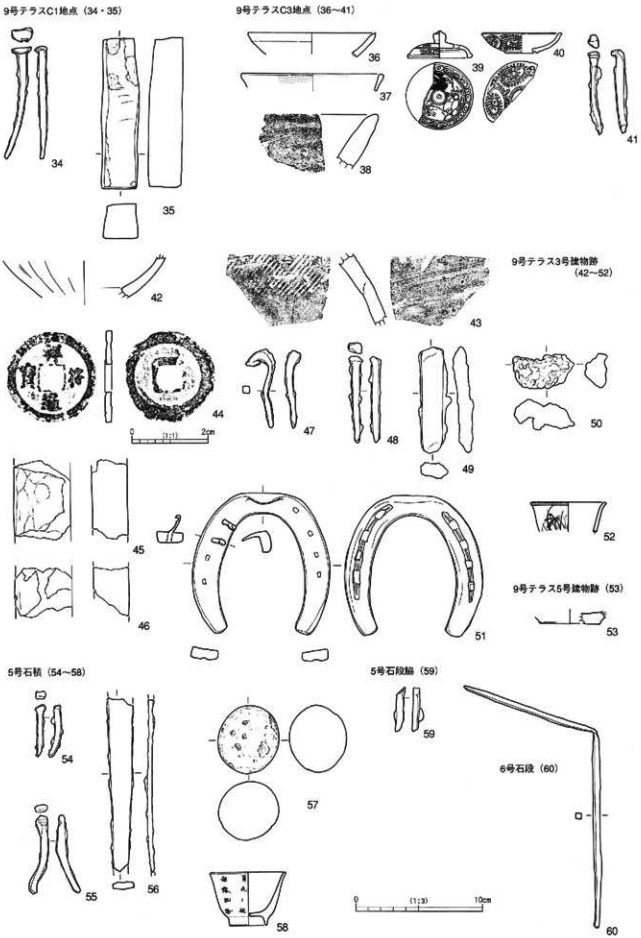

9号テラスC1地点（34・35）
9号テラスC3地点（36～41）
9号テラス3号建物跡（42～52）
9号テラス5号建物跡（53）
5号石杭（54～58）
5号石段脇（59）
6号石段（60）
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0 (1:1) 2cm
0 (1:3) 10cm

図19　遺物（2）

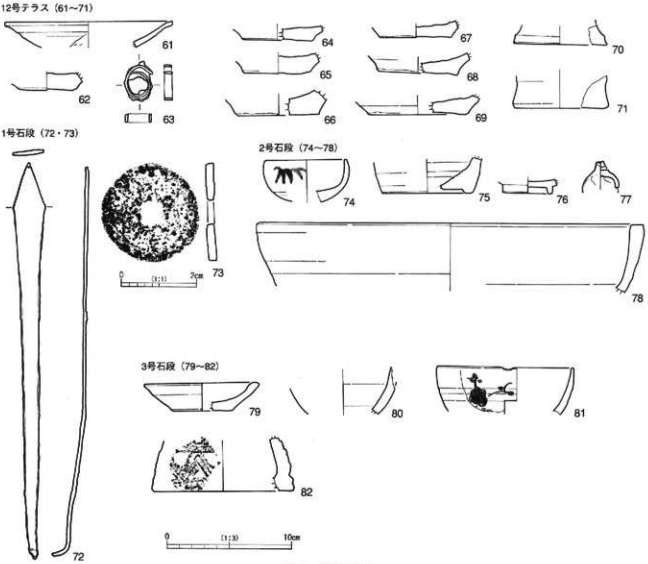


図20　遺物（3）

74は18世紀後半と思われる瀬戸の磁器で、筆文様が描かれている。75・76は近世陶磁器で、75は瀬戸美濃系である。77は土鈴で、2号テラス出土の13とほぼ同形で、近世の所産であろう。78は15・16世紀代の内耳土器で頸部が割と強く括れる古手のタイプと思われる。ほかに内耳土器片2、近世陶器碗4、土師質土器皿2、石英3がある。

3号石段出土遺物（図20）

常滑系小皿（79）、壷？（80）、磁器碗（81）、縄文土器（82）がある。

82は縄文前期末、十三菩提式土器で、林道下の山道にもわずかに縄文土器が採集でき、調査区内から黒曜石製フレイク片が出土している。当該期の集落拡散をうかがわせ、南斜面で水が豊富なこの地が早くから開けていたことを示す。79は12・13世紀に遡る可能性のある常滑あるいは渥美の小皿。この出土により、3号石段が当初からのルートであった可能性がある。81は瀬戸かと思われる近世の碗。そのほか、柱状高台皿？1、土師質土器皿片2、近世碗1、土師小片2、縄文前期初頭1（繊維土器）、弥生後期甕片1（櫛描波状文）がある。

4号石段出土遺物

図化資料はないが、土師小片3が出土している。

6号石段出土遺物（図19）

不明鉄製品（60）が石段最下面付近から出土した（図13参照）。長さ復元長27cmの断面四角の棒で、中ほどで「く」の字に折れ曲がっている。棒の一端は鈍く尖っている。

以上の図化資料のほか、表採資料として2003年5月18日に土師質土器皿片6、2004年4月23日に常滑・渥美系甕片1、土師器甕片1、土師質土器皿片8、近世灰釉壷1、同5月11日に土師質土器片41（ほとんど皿）、土師器甕？片1、鉄？滓1が採集されている。多くは12号テラスでの採集品である。

表2　土器・陶磁器観察表

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高cm	整形技法	色調	胎土	注記・備考
18	1号建物	8	土師	坏?		11.8/?/?	ナデ	灰褐	雲・長	F3-95
18	2-2号テラス	10	土師	坏		12.9/?/?	ナデ	明褐	長・赤	E2-148
18	2-2号テラス	11	土師柱状	高台坏		7/4.1/?	ナデ,底部糸切?	暗褐	石多・雲・角	E2-130
18	2-2号テラス	12	瓦質土器	火鉢?		?/?/?	ナデ	灰	白	F2-123
18	2-2号テラス	14	土器	土鍋		30/18/13.3?	ナデ	暗褐	長・白・角	E2-105・106,丸底
18	2号建物	17	磁器	茶碗	近世	10.4/?/?	染付(草花)	白	灰色,細少	D1-32,くらわんか碗
18	2号建物	18	青磁?	碗		?/?/?	内面当て具痕?	灰褐	黒,やや密	D1-36,[illegible]
18	2号建物	21	瀬戸?	香炉	近世	10.5/7.3/6.2	ナデ,胴部文,施釉	緑褐	黄褐色,白	D2-163・166・175・176,脚3箇所
18	2号建物	26	瀬戸?	灯明具	近世	4.7/3.5/4.8	ナデ,底部糸切,施釉	黒褐	灰白色,密	2建42,完形22g,杯状,底部中央に孔
18	2号建物	27	陶器?	灯明皿	近世	11.2/4.2/1.8	ナデ,施釉,外面回転ヘラ削り	茶	灰色,緻密	2建38,完形
18	2号建物	28	陶器?	灯明皿	近世	11.7/?/?	ナデ,施釉	暗赤	灰色,密	2建40,破片
18	2号建物	29	陶器,天目?	碗	近世	10/5.2/6.9	鉄灰釉,施釉	暗褐・灰	灰	2建36,D2 [illegible]
18	2号建物	30	陶器,灰釉	壺	近世	?/?/?	ナデ,外面灰釉	灰	白	D1-132・133
18	2号建物	31	土器	土鍋?	近世?	29.4/?/?	ナデ	明褐	密	2建30,外面スス付着
19	9号テラス	36	土師	坏		10/?/?	ナデ	橙褐	長・白	C3-71
19	9号テラス	37	土師	坏	平安?	11/?/?	ナデ	灰白	長?	C3-68,口縁外面煤状に黒変
19	9号テラス	38	土器	土鍋?		?/?/?	ナデ	褐	長・白・角	C3-70,縄文に類似
19	9号テラス	39	磁器瀬戸	急須蓋	近世	4.8/ /2.2	呉須による梅・唐草文	白	白色,緻密	C3-67,19C後半
19	9号テラス	40	磁器	猪口	近代	6.4/2.6/1.6	端部等の染付文(?)	白	白色,緻密	C3-77
19	3号建物	42	青磁	碗	12・13C	?/?/?	蓮弁文	緑灰	灰	3建31,龍泉窯
19	3号建物	43	白磁	碗	12・13C	?/?/?	印花「米」?	暗灰	長	3建20,陶磁器
19	3号建物	52	磁器	碗	近世	5.9/?/?	染付(草花)	白	白色,緻密	3建32
19	5号建物	53	土師	坏?		?/4.8/?	底部糸切	褐	長・赤・雲	4建18,小破片
19	5号石積	58	磁器	坏	近代?	6/3/4.2	外面銘款?,底面文字	白	白色,緻密	5石積17
20	12号テラス	61	土師	坏	平安	13.2/?/?	ナデ,ヘラ削り	赤褐	長・石・角	西沢2　65,10C前半
20	12号テラス	62	土師	?		?/4.3/?	底部糸切	赤褐	長・石	西沢2・64
20	12号テラス	64	土師	皿		?/5.5/?	底部糸切	赤褐	長・石・角・雲	12テ表採
20	12号テラス	65	土師	皿?		?/5.1/?	ナデ	橙	長・角	12テ表採,底部調整
20	12号テラス	66	土師	坏		?/6.4/?	底部糸切	暗褐	黒色長・石・雲	12テ表採
20	12号テラス	67	土師	皿		?/5.4/?	底部糸切	明褐	長多・角	12テ表採
20	12号テラス	68	土師	皿		?/6.2/?	底部糸切	赤褐	長・石・角	12テ表採
20	12号テラス	69	土師	坏		?/7.8/?	底部糸切	暗褐	石・長・角	12テ表採
20	12号テラス	70	土師柱状	高台	平安末	?/7.2/?	底部糸切	褐	長・雲	12テ表採
20	12号テラス	71	土師柱状	高台	平安末	?/7.2/?	底部糸切	黄褐	長・雲・石	12テ表採
20	2号石段	74	磁器	仏飯器	近世	6.2/?/?	染付(銘)	白	白色,緻密	2石段7,19C前半
20	2号石段	75	陶器	徳利	近世	?/7.1/?	灰釉,ナデ	灰白	密	2石段4
20	3号石段	76	陶器	碗	近世	?/3.9/?	灰釉	灰褐	やや粗	2石段
20	3号石段	78	土器	内耳	中世	30.2/?/?	ナデ	暗褐	雲多・赤・長	2石段9,外面黒変
20	3号石段	79	山茶碗?	小皿	12・13C?	9/4.8/2.3	ナデ,内面灰釉	灰	やや密	3石段25
20	3号石段	80	常滑?	甕	12・13C?	?/?/?	ナデ	灰褐	密	3石段20
20	3号石段	81	磁器	碗	近世	10.7/?/?	染付(梅)	白	白色,緻密	3石段16
20	3号石段	82	縄文	深鉢	前期末	?/11/?	三角印刻,押引文	茶褐	デ・赤・角	3石段23,十三菩提式

胎土の略　長-長石,石-石英,角-角閃石,雲-雲母,赤-赤色粒子,デ-デイサイト,白-白色粒子

表3　石製品観察表

図	地点	No.	種別	長/幅/厚cm	重さg	石材	色調	注記	備考
18	1号テラス	6	砥石	8.4/3.6/0.9	45.6	黒色片岩	暗青	A90	砥面か,砥面2,裏面剥離
18	1号テラス	7	砥石	6.7/2.7/1.3	33.2	緑色凝灰岩	灰緑	A85	砥面か,砥面2
18	2号建物	25	砥石	12/2.4/1.4	63.2	緑色凝灰岩	灰緑	D2	端部欠損,砥面1
18	2号建物	33	砥石	6.1/2.6/2.3	36.8	砂岩	褐	2建37	欠損,砥面2,他面剥離
19	4号建物	35	砥石	11.8/2.9/2.6	168.3	凝灰岩	褐	C1	完存,砥面2
19	5号石積	57	磨り石	3.3/4.8/4.5	166.3	花崗閃緑岩	灰黒	5石積12	完存,縄文の石器か

表4　土製品観察表

図	地点	No.	種別	時期	長/幅/厚cm	重さg	整形技法	色調	胎土	注記	備考
18	2-2号テラス	13	土錘	近世	?/2.3/0.3	1.4	ナデ	灰褐	長	E2-120	破片
19	3号建物	45	鞴羽口		?/9/2.8	103.8	ナデ,溶着痕	赤褐～黒褐	長・雲	3建27	破片,46と同一
19	3号建物	46	鞴羽口		?/9/2.8	57	ナデ	赤褐～黒褐	長・雲	3建26	破片
20	2号石段	77	土錘	近世	?/2.7/0.3	3	ナデ,孔(3.5mm)	褐灰	雲・長	2石段	破片

表5　金属製品観察表

図	地点	No.	種別	材質	長/幅/厚cm	重さg	注記	備考
18	1号テラス	1	鎌	鉄	12.8/2.3/0.5	11.6	A83	完存
18	1号テラス	2	鎌	鉄	14.7/1.8/0.5	48	A87	完存
18	1号テラス	3	角釘	鉄	7.4/1.4/0.5	5.9	A88	完存,先端屈曲
18	1号テラス	4	角釘	鉄	7.0/2.2/0.7	5.9	A86	完存,屈折
18	1号テラス	5	角釘	鉄	3.2/1.0/0.4	1	A92	完存
18	2-2号テラス	9	釘形鉄製品	鉄	6.2/1.4/0.3	3.3	E1-98	端部欠損
18	2-2号テラス	15	不明鉄製品	鉄	4.7/0.9/0.4	2.9	E2-142	板状,両面完存
18	2号テラス	16	角釘	鉄	4.1/1.1/0.6	4.6	E2-132	欠損
18	2号建物	19	鋲形鉄製品	鉄	10.7/1.8/0.6	21	D1-37	完存,端部屈折,片面に錆
18	2号建物	20	銭貨	銅	2.2/2.2/0.1	1.8	D1-180	寛永通宝,完存
18	2号建物	22	煙管雁首	銅	6.3/1.6/2.2	8.8	D2-161	完存
18	2号建物	23	煙管吸口	銅	5.3/1/1	3.1	D2-138	完存
18	2号建物	24	和鋏	鉄	12.6/2.5/0.5	20	D2-162	完存
18	2号建物	33	銭貨	銅	2.4/2.4/0.1	2.4	2建34	完存
19	4号建物	34	角釘	鉄	9/1.6/1.1	11.3	C1-49	完存
19	9号テラス	41	角釘	鉄	6.6/0.8/1	7.9	C3-79	完存
19	3号建物	44	銭貨	銅	2.4/2.1/0.15	2.3	3建25	祥符通宝,完存
19	3号建物	47	角釘	鉄	6.1/2.4/0.9	6.5	3建10	屈曲
19	3号建物	48	角釘	鉄	6.7/1/0.7	8.3	3建21	完存
19	3号建物	49	不明鉄製品	鉄	8.2/2.1/1.3	53.5	3建30	完存,鉄素材?
19	3号建物	50	鉄?滓	?	4.8/2.3/1.7	29.8	3建24	端部欠損,錆
19	3号建物	51	鋳鉄	鉄	11.1/10.8/2.3	217.7	3建22	完存,無加工
19	5号石積	54	角釘	鉄	4.2/0.8/0.5	3.1	5石積11	屈曲,先端欠?
19	5石積	55	角釘	鉄	6.3/0.9/0.8	7.3	5石積16	屈曲,頭部不明瞭
19	5石積	56	鋲形?鉄製品	鉄	13.7/2.2/0.4	34.9	5石積14	両端欠損
19	5号石段	59	角釘	鉄	3.5/0.8/0.5	2.8	5石段2	両端欠損
19	6号石段	60	不明鉄製品	鉄	26.5/0.5/0.5	20.7	6石段45	屈折,上端のみ先る,完存
20	12号テラス	63	不明鉄製品	鉄	2.9/2.1/0.7	5.2	西沢1・55	錆着状態
20	1号石段	72	板形鉄製品	鉄	31.1/2.5/0.3	57.8	1石段1	端部屈曲
20	1号石段	73	銭貨	銅	2.6/2.6/0.2	3.6	1石段2	寛永通宝か

第4章　総　括

2年度にわたる調査の結果、現奥社地を中心にテラス群が分布し、それらの中に礎石建物跡が複数存在することがわかった。中心的な9号テラスには12～13世紀に遡る3棟の建物群が方形の広場の周りに計画的に配置され、仏堂群としての空間を構成している。また5号テラスから1号テラスの間には石段が整備され、金桜神社奥社地として維持されてきた。

奥社地遺跡の建物群の変遷は、次のように整理できる。

10世紀以前　本遺跡では縄文・弥生土器が出土し、10世紀以前、既に人の通う道筋または集落として開かれていたことが想像される。

10世紀前半　12号テラスから甲斐型土師器皿が出土したことから、9・12号テラス周辺が最も早く開かれた可能性がある。遺物量が非常に少ないことから、本段階に堂社が存在したかどうか、不明といわざるをえないが、この時期には各地で山麓開発が進み、里に近い山中に山林寺院が設けられている。甲斐国内の一例として、笛吹市春日居町�holy山で10世紀前半の修行窟とともに山房とみられるテラスが存在する。また韮崎市苗敷山頂には寺院とともに10世紀後半頃の竪穴住居群が見つかっている。本段階で9号テラスの造成、礎石建物群建立が行われたとは考えにくいものの、何らかの山房的な堂があったと想像される。なお、柚口金桜神社が延喜式内社であれば延喜年間には神社が既に存在し、国司巡拝が行われていたこととなり、甲斐型土器が唯一の手がかりといえる。

12～13世紀前半　9・12号テラスとともに、2号テラス付近が中心的な場として利用されている。3号建物をはじめ4・5号建物、5号石積、4・6号石段が整備され、山寺としての山内の施設が整えられた。中でも3号建物跡は3面庇（あるいは裳、または縁）付の3間堂で、向拝が付く可能性がある。屋根形式は入母屋あるいは寄棟と思われるが不明で、瓦の出土が皆無であることから檜皮あるいは柿葺きである。内部は板張りで、中央奥には礎石をもつ須弥壇（厨子）があり、大形の立像が安置されていたとみられる。寂円が写経した米沢寺を本遺跡と推定することが許されるならば、9号テラスの建物群が米沢寺に相当する可能性がある。遺物から推測すると、9号テラスを中心とする仏堂域は13世紀代後半以降に急速に衰退したように見受けられる。

15～16世紀　2号テラスに内耳土器片があり、5号テラス付近にも本期の遺物がわずかに出土している。また5号テラスに付属する5号石段、3号石積は中世的な石積で、この時期に整備された可能性が高く、石積整備に伴い2号建物の前身として隋神門的な建物が建立されたのであろう。この時期、仏堂群は既に廃絶して久しいが、神社は維持され、再整備されたと考えられる。2・3号石段の整備も本時期であれば、大規模な整備が実施されたことになる。

17～18世紀　5号テラスの割拝殿は本段階の建立と

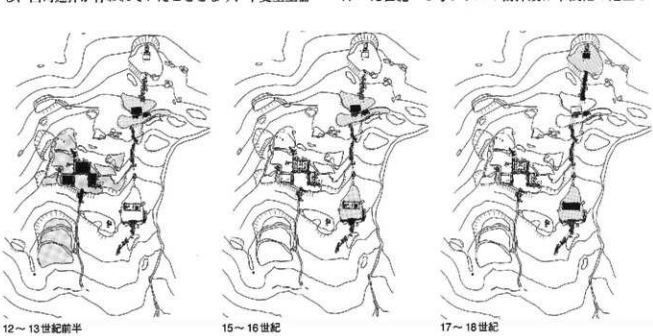


図21　遺構の変遷（想定を含む）

考えられ、18世紀後半には廃絶している。1号石段は近世の所産で、本殿階で新設されたと仮定すると、1号テラス、1号建物も本段階に新設された可能性がある。奥社拝殿と割拝殿、および1号石段の設置が行われたと推察され、正徳2年（1712）の金桜神社の小倉原への移転に伴い、本地は金桜神社奥社地として整備されたものと理解される。

19世紀以降　『甲斐国志』には奥社建物に関する記述がないことから、19世紀初頭までに建物は失われたのではないか。

以上のように、奥社地遺跡は主に東側の神社域と、西側の寺院域に区別され、古代末～中世前期に寺院域が盛行したのち、神社域のみが近世まで維持されてきたと考えられる。

金桜神社奥社地の変遷を考える上で大いに参考になるのが静岡県湖西市の大知波峠廃寺である。そこでは10世紀第2四半期に石垣基壇を備えた三間四面正面孫庇の礎石建物1棟が出現し、10世紀後半に2棟、10世紀末～11世紀前半には7棟の堂宇が加わり盛行するが、11世紀後半に衰退し、末には廃絶している（後藤2002）。この点について山本義孝氏は天台系山林仏教が本格的に確立するのは10世紀後半で、各地に山房が出現し、10世紀後半から11世紀に山房の中から山岳寺院が成立するという。その後、修験道が組織化される中で一国内、あるいはそれを越えた峰入修行（国峰）も行われるようになって、山岳修行行のあり方が大きく変化し、大知波峠廃寺も形を変えたと考察している（山本2002a）。奥社地遺跡での修験道のあり方が、発掘調査を通して明らかにできなかったものの、遺跡の出現、盛行、衰退の変遷はよく類似することから、概ね山本氏のいう流れを想定することができると思われる。

以上の考古学的にみた遺構変遷と、冒頭に記した寺社記等による伝承の間には較差がある。とくに南北朝期に修験道場として栄えたという伝承と、天正期の火災（織田勢による焼き討ち説）についての2点である。南北朝期（14世紀代）には寺院域は既に廃れ、神社域のみ維持されていたと思われるが、明確な遺構、遺物はなく、とりたてて当時の繁栄ぶりを支持できる資料はない。南北朝期の可能性のある唯一の遺品として、柚口金桜神社所蔵の蔵王権現懸仏があるのみである。織田勢の焼き討ちについては、調査の結果、そうした痕跡は皆無といってよいだろう。炭化物はわずかに出土しているが、焼土などの火災痕跡はなく、被災した16世紀代の遺物もない。甲斐国内では廃れた寺社の伝えとして織田による焼き討ちとする伝承が各地にあり、本例も全くの創作といえる。

寺院域が早く廃れてしまったのに比べ、奥社については中世から江戸期に2度の大きな整備が実施されている。これまでは神社と雲峯寺が一体のものとして、二本松から小倉原へと、共に移転したような説明がされてきたが、両寺社が正徳2年に現在地へ移転するまでは、金桜神社は奥社の地に維持されていた可能性がある。本遺跡は式内社金桜神社の最有力候補地で、これまでの調査では神社関連の遺構は明確でない。また延宝式前後の遺物はごくわずかに出土しているのみであるが、2号テラス付近に旧社殿跡が存在したらしく、今後の調査によって明らかにされることを期待したい。

さて、奥社地遺跡がもっとも注目されるのが「米沢寺」との関連においてである。康和5年に勝沼柏尾山に埋経された写経が書かれた山寺として経筒銘文に登場して以来、「米沢寺」は著名な存在となったが、それ以外に今日まで同寺名を記した史料は発見されておらず、幻の寺といえる。これまでは「米沢山雲峯寺」という柚口現存の寺院名と「高天原」の旧所在地の存在から、奥社地遺跡のある高天原が米沢寺であろうという推定がなされてきている。

本調査の結果、確実に仏堂といえる礎石建物跡が検出されたこと、出土遺物から12～13世紀に遡ることが明確になったことが最大の収穫で、康和5年段階に実際に堂が存在したらしいことがわかった。では奥社地遺跡が「米沢寺」であったといえるだろうか。

勝沼大善寺が柏尾山寺とされたように、「米沢寺」は米沢山寺と言い換えることができる。「米沢山」については、これまでとくに具体的な指摘はないが、『甲斐国志』「中牧山」中に見られる山名で、位置的には現、東御殿付近に相当し、19世紀初頭までは一般的に通用した名称であったらしい。

「中牧山」とは特定の山を指した名称ではなく、中牧周辺の山という意であり、今日では失われた山名といえる。あらためて経筒銘文の「東山郡内牧山村米沢寺」という文字に注目すると、従来ごく当たり前に「東山郡内」の「牧山村」と解釈してきたわけであるが、これは「東山郡」の「内牧山村」ではないかと気づく。「内」と「中」は同義で、古訓では「中」を「ウチ」と読む例はあることから、経筒に刻字する過程で誤写されたとするならば、「中牧山村米沢寺」となり、より明確に奥社地の所在地を示している。

中世以前の「中牧山村」という村名を記した史料は存在しない。しかし、中牧山周辺の地域が古代末以来「中牧山村」と呼ばれた可能性は十分あり、金桜神社

奥社地遺跡が「中牧山村」「米沢寺」であった可能性がきわめて高いと考えたい。「米沢寺」所在地論争に対して、いささか暴論ではあるが一石を投じたいと思う。

本遺跡は、康和2年から3年間、勧進僧寂円が写経のために滞在した「米沢寺」である可能性がもっとも高い遺跡であり、3号建物跡が三間堂であって須弥壇を備えていることから、「千手観音堂」にふさわしい。寂円が「千手観音宝籠居し」写経したという写経所が4・5号建物跡ではなかったか、あるいは10・11号テラスの一部は経紙の原料を栽培するための畑ではなかったか、と想いを巡らすこともでき、より実証的な資料の出現が待たれる。

仮に奥社地遺跡が米沢寺とするとどのようなことがいえるだろうか。

勝沼町大善寺の山中で発見された柏尾山経筒銘文（康和5年＝1103）には、文末に三枝宿禰守定、同守継、権介守清が名を連ね、三枝氏が仲介して経筒埋納行事が執行されたことがわかる。米沢寺から場所を移して往生院で行われたもので、往生院とは現大善寺の旧本堂であったといわれる。大善寺は三枝氏の氏寺ともいわれ、三枝氏が創建に関わったとする伝説もある。その後、有名な「長寛勘文」事件（長寛元年＝1163）では在庁官人三枝守政が登場する。一般的に三枝氏はその事件をきっかけに衰退したといわれているが、笛吹市御坂町の福光園寺の古祥天女像（寛喜3年＝1231）の仏像胎内銘に大檀越三枝尼妙、以下三枝一族が名を連ねるなど、13世紀前半までの隆盛が伺える。

僧寂円は埋経に際し、米沢寺から大善寺に移動していることから、両寺は緊密な関係があったと考えられる。往生院が天台宗で、柚口の米沢山雲巌寺にも智証上人勧請の伝承から天台宗寺門派の関わりが明瞭であり、共通点はある。

米沢寺についても三枝氏が関与した寺ではなかったろうか。今回の調査で明らかにされた仏堂群の礎石は相当大型で、テラス造成も大掛かりなものであり、たとえば牧丘町域の豪族クラスの氏寺というレベルではなく、確証はないが甲斐国レベルの寺と考えられる。在庁官人に連なる三枝氏の主導のもとで、建立され、維持された寺院ではなかったか。

柚口高天原の旧寺院名を「米沢山大禅寺」とする記録があるほか、勅願所であったという伝承もあることから、勝沼大善寺との関連性がうかがえ、国司関与の寺院という想像もできる。合わせて写経した場所という点を重視するならば、甲斐国官衙あるいは三枝氏の写経所という性格が浮かび上がる。

そう考えると奥社地遺跡の仏堂域の消長が12～13世紀に隆盛し、13世紀後半以降の衰退が著しい点と、三枝氏の動向がうまく合致するようにみえる。つまり後ろ盾であった三枝氏の衰退とともに米沢寺もまた衰退したと考えることができるだろう。

林道南側の山林中には、手付かずのまま多数の石積をともなうテラス群や石組が埋もれている。それらの石積の雰囲気は奥社地のそれと類似する。試掘調査を経た上で結論づけるべきではあるが、奥社地の寺院を支えるための僧房域が林道南地区に想定でき、両者は一体のものとして存在したことが考えられる。遺跡の範囲確定のため、このテラス群についても早急に調査を開始する必要性がある。

現在、遺跡はひっそりと山中に埋もれており、すぐに差し迫った開発が予定されているわけではない。しかし、植林された木の根が礎石を覆い、遺構に影響を与える箇所が見受けられるほか、周辺では現在、県有林内で森林間伐が行われ、その際に無意識に石積やテラスなどを壊してしまう可能性がある。また遺跡東の沢沿いには進入路が取り付けられているが、さらに奥へ道が付けられて遺跡に波及する危険性もあり、注意を要する。今後、重要遺跡として周知する必要があることから、まずは県史跡指定することが急務であろう。そのためには、少しずつでも計画的に調査を継続し、全体像を明らかにして重要性を確かめ、成果を公表する努力が必要となる。とくに林道南のテラス群については、調査を実施したうえで時代や性格を調査し、奥社地遺跡との関連性が強いことがわかれば、両者一体の遺跡として大きく括って保存処置を講ずる必要性も生じる。今後、水源涵養林保護と遺跡保存が歩み寄りながら、豊かな森林を生かした山間地独自の史跡整備ができればと、願うしだいである。

本報告を刊行するにあたり、現地では清雲俊元氏、後藤建一氏、山本義孝氏をはじめ、多くの方々より適切なご指導をいただいた。建築構造、時代性については寺本就一氏、室伏徹氏よりご教示を受けた。古文書、絵図については瑞内寿氏、高橋修氏よりご教示を受け、とくに史料⑫の読み下し、解釈については高橋氏、史料④の読み下しについては堀内氏にお手数をおかけした。信藤祐仁氏には東御跡から小倉山までの踏査に同行していただいた。また発掘調査に際し、厳冬期という悪条件の中、発掘に参加して下さった皆さんには、準備から片付けにいたるまでご苦労をおかけした。そのほか多くの方々のご指導、ご協力のもと、本報告書の刊行にこぎ着けることができた。文末ではあるが、

今日に至るまでの関係者すべての皆様に感謝申し上げるとともに、本報告が地域史の一助となることを願ってやまない。

引用・参考文献

山梨教育会東山梨支部　1916『東山梨郡誌』
原全教　1935『奥秩父』
上野晴朗　1962「山梨県勝沼町柏尾・台山発見康和五年銘経筒その他埋納品調査報告」『考古学雑誌』48-2
山梨県立図書館　1968『甲斐国社記・寺記』
佐藤八郎校訂　1971『甲斐国志』雄山閣
磯貝正義　1978「山梨県勝沼町出土経筒の研究」『郡司及び采女制度の研究』吉川弘文
清堂俊元　1978『甲斐金峰山と修験道』『富士・御嶽と中部霊山』山岳宗教史研究叢書9　名著出版
牧丘町誌編纂委員会　1980『牧丘町誌』牧丘町役場
小柳義男　1983「甲斐・金峰山頂出土の修験道関連遺物」『長野県考古学会誌』47
山梨県教育委員会　1987『御嶽道』山梨県歴史の道調査報告書12
信藤祐仁　1989「金峰山遺跡群」『甲府市史資料編』1
島田恵子　1994『金峰山修験道遺跡』川上村教育委員会
梅原功一・岡野秀典　1994「甲斐金峰山の信仰」『丘陵』14　甲斐丘陵考古学研究会
田代孝　1995「山梨の経塚信仰」山日ライブラリー
後藤建一　1997『大知波峠廃寺跡　確認調査報告書』湖西市教育委員会
山梨県　1999『山梨県史　文化財編』
古泉弘　2001「柵管」『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編
後藤建一　2002「大知波峠廃寺跡補遺」『湖西連峰の信仰遺跡分布調査報告書』湖西市教育委員会
山本義孝　2002a「湖西連峰における山岳信仰とその変遷」『湖西連峰の信仰遺跡分布調査報告書』湖西市教育委員会
山本義孝　2002b「深山田遺跡と中世修験道」『深山田遺跡』明野村教育委員会
文化庁　2003『新版被災等による焼失文化財』戒光祥出版
大村和夫　2004『木漏れ日の追関　「牧丘町」山岳信仰と金桜神社奥社地』
牧丘町教育委員会　2004「山岳信仰学術調査報告書Ⅰ」
鵜原功一・大崎文裕　2005「金桜神社奥社地の研究」『山梨県考古学協会誌』15

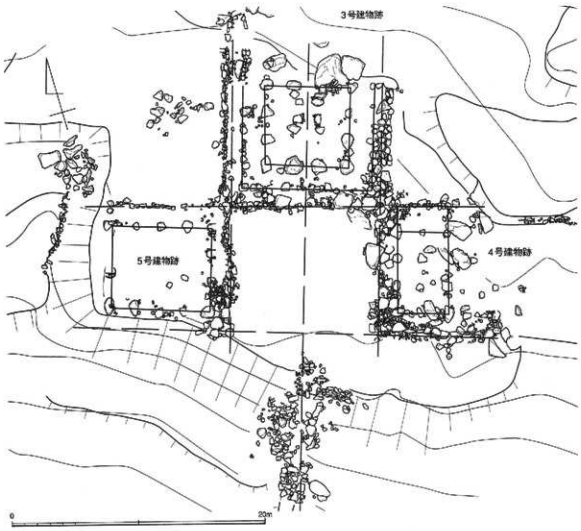


図22　建物群の配置（1/300）

1：遺跡入り口より見た宮土山

2：遺跡入り口より見た小高山

3：東田駅から小高山の遠々

4：仙三会桜神橋付近から施ノ山方面を見る

5：石灯篭（左側に「米沢山」）

6：神賀坂

7：琴川沿いの道

8：子の神

図版 2

1：青山千坊

2：護摩堂跡

3：鳥ノ口橋のアケマチ

4：杣口金桜神社奥社

5：長崖背後の岩田

6：岩続きの尾根

7：尾根中の得意？

8：自然の岩室

1：東面屋へ続く尾根道

2：東面屋川脇から鉄砲山を見る

3：1号テラス

4：2号テラス・1号石垣

5：7号石段

6：1号石垣

7：7号石段東側

8：23号テラス脇の東斜

図版4

1：2号建物跡（西側より）

2：2号建物跡（西側）

3：2号建物跡礎石検出状況

4：5号石段から南を望む

5：3号石積・5号石段（西側より）

6：3号石積・5号石段（東側）

7：4号石積（西側）

8：4号石積（東側）

4：3号建物跡中央に設定した南北トレンチ

1：3号建物跡（南より）

5：6号石段

2：3号建物跡（西北より）

3：3号建物跡（東側敷石）

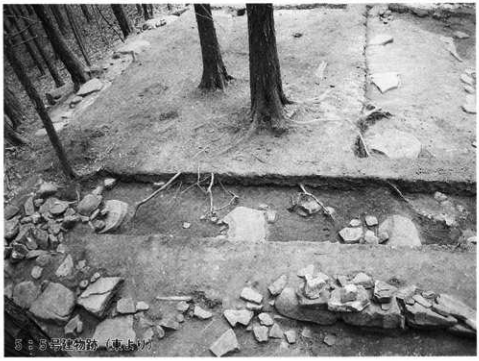
図版6

1：4号建物跡（東より）

3：4号建物跡調査前

2：4号建物跡（南より）

4：4号建物跡調査風景



5：5号建物跡（東より）

6：5号建物跡礎石抜き取りピット

1：鉄製品出土状況

2：4号石段（南まり）

3：4号石段（東まり）

3：4号石段上端部

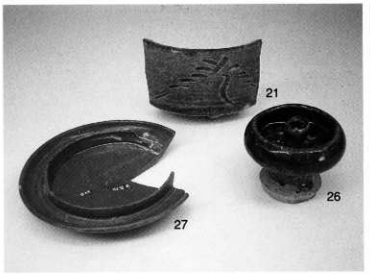
5：1号石組

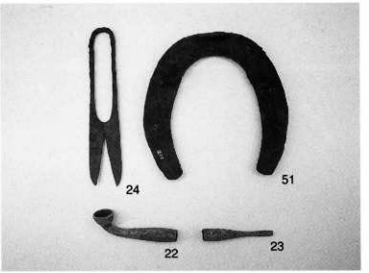
6：1号石組西側石積状況

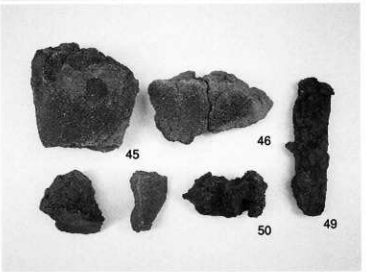
7：2号石積（南まり）

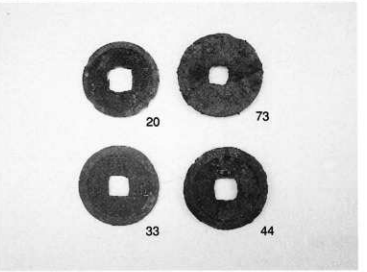
8：6号石積

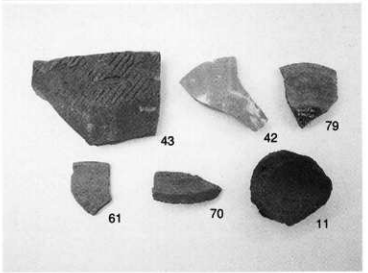
図版8

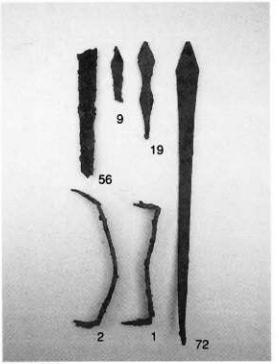

21
26
27


24
51
22
23

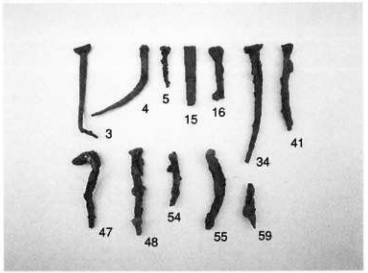

45
46
50
49


20
73
33
44


43
42
79
61
70
11


9
19
56
2
1
72

出土遺物


3
4
5
15
16
34
41
47
48
54
55
59

報告書抄録

フリガナ		ソマグチカナザクラジンジャオクシャチイセキ
書名		柚口金桜神社奥社地遺跡
副題		山梨市牧丘町柚口地内の山岳寺社跡　学術調査報告書
シリーズ名		山梨市文化財調査報告書　第10集
著者名		櫛原功一
発行者名		山梨市教育委員会
編集者名		(財)山梨文化財研究所
住所・電話番号		山梨市教育委員会　〒405-0031　山梨県山梨市万力1830　TEL0553-22-9611 (財)山梨文化財研究所　〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566　TEL055-263-6441
印刷所		帝京サービス
発行日		2006年3月12日
高畑遺跡	所在地	山梨県山梨市牧丘町柚口
	1/25,000 地図名・位置・標高	緯度 35° 47′ 18.2002″　経度 138° 41′ 38.93275″ 標高 1026～1075m
遺跡概要	主な時代	平安時代末～中・近世、明治時代
	主な遺構	礎石建物を含む山岳寺院跡
	主な遺物	土師質土器片、陶磁器片、釘、中国銭ほか
	特殊遺構	礎石建物（仏堂）、石段
	特殊遺物	渥美甕片、青磁碗
	調査期間	2006年1月11日～3月6日

なお緯度・経度は世界測地系データに基づく数値である。

山梨市文化財調査報告書　第10集

柚口金桜神社奥社地遺跡

—山梨市牧丘町柚口地内の山岳寺社跡　学術調査報告書—

平成18年（2006）3月12日　発行

発　行　山梨市教育委員会
〒405-0031 山梨県山梨市万力1830　TEL 0553-22-9611

編　集　(財)山梨文化財研究所
〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566　TEL 055-263-6441

印　刷　(株)帝京サービス